

ものがたり

慈濟

ツーチー 2021年3月 291





● 扉の言葉 文・證嚴法師

訳・濟運 撮影・黃筱哲

大愛は負担を残さない

慈悲喜捨は「無私無我」を体現し、

心を一つに法の下で、「見返りを求めない奉仕」を実践する。

「小我」が融合して「大我」になり、

愛は負担を残さず、人同士の区別があってはならない。

私情や小愛が結集して長く続く大愛になれば、

「徳と無限の愛はこの世を庇護してくれる。」



慈濟日本サイト

目次

【編集者の言葉】
 円満な人生の終止符
 善耕／訳 4

【主題報道】
 患者自主権・安らかな生と死
 無常が来るまでに、この瞬間を生きる
 有田夏子／訳 8
 有田夏子／訳 20

【新型コロナ感染拡大地域にて】
 アルゼンチン
 人は絶対に天に打ち勝つことができるのか？
 御山凜／訳 32

カナダ
 慈悲が勇気をもたらしてくれる
 心嫻／訳 39

モザンビーク
 食糧危機には農業で自力更生
 葉美娥／訳 46

【菜食するしかない】
 マレーシア・ケダ人工透析センター
 数字が物語る 野菜と果物の健康効果
 有田夏子／訳 54

【證嚴法師のお諭し】
 肉食を断ち、菜食で健康を守る
 慈願／訳 62

【国際慈善】
 宗教を超えた協力でインドを支援
 慈願／訳 68
 最も貧しい場所で最も苦しい人をケアする
 有田夏子／訳 77

【人物誌】
 真面目に生活して、許しを請う
 惟明／訳 86
 裸足のお婆さん 環境保護の道を着実に
 翁俊彬／訳 96

【行脚の軌跡】
 経典を活用する
 済運／訳 101

二月の出来事
 済運／訳 107

表紙



世界でコロナ禍の終息が一年経った今も未だ見通しの立たない中、人々は新しい生活様式を作り出した。今の子供は防疫措置やオンライン授業に徐々に慣れてきている。ジンバブエ・マズビンゴ省のムレレクワ (Murerekwa) 小学校の生徒たちは医療用マスクが足りないため、様々な布や衣服で口や鼻を覆って感染の予防をしていた。(撮影・フレンジジレ・ジャネ)

円満な人生の終止符

高齢化社会において死とどう向き合うか。益々多くの人が課題として深く考えるようになった。

医療技術で命を救うのは、逆に生と死の問題を曖昧にしまっている。「ニューヨークタイムズ」の記者ケイティ・バトラーは、「天国の扉をたたくとき：穏やかな最期のためにわたしたちができること」という本の中で、一九六〇年代に生命維持装置が発明されてから、半死半生の生命状態を生み出し、「植物人間」と「脳死」という新しい語彙を生み出したと指摘している。治療は命の品質を低下させると同時に、医療コストが跳ね上がり、医師と患者が対立する中、医療スタッフは「命を救う」役割から責任を逃れることはできない。

多くの終末期の患者を含めて、苦痛から解放されるために、行き場をなくした結果として自殺を試みる人は少なくない。しかし、世界保健機関(WHO)などの研究によると、自殺を試みた十から五十人のうち、成功するのは僅か一人だけである。自殺は成功してもしなくても、家族を苦しませ、社会に影響を与える。

中華系の社会では、死に関する話題はいつもタブーである。患者は、親族との緊密な関係の中で、病から死に近づいた時、複雑な情緒に直面しなければならぬ。特に「孝行」という家族倫理の影響の下に、患者は生と死を自分の意思で決められるとは限らない。かつて、あるメディアが調査したところ、九十%以上の人は末期に生命維持を放棄することを願っているが、六十%から七十%の人は肉親が少しでも長く生きてくれることを望んでいる。家族が

感情的な名残惜しさや心の痛みを経験する時、お互いの意見の不一致によって承諾しようとしなかったことから、患者の願いを素直に受け入れて尊重することが困難になっているようだ。

従って、「死ぬ時期」は知識人たちが勝ち取ろうとする目標となっている。幸いなことに、「患者自主権利法」がやっと二〇一九年一月に施行され、病人の意識がはっきりしている間に、専門の医療チームと相談して、後日、重篤になった時に受けたり拒否したりする医療ケアを選択し、「事前医療行為指示書」に署名することができるようになった。これによって、病状が回復しない場合の道徳的ジレンマを緩和し、「医療法」の枠組みの下に様々な延命措置を拒否できないという患者の単一的な立場が変わることに期待がかかっている。

今期の主題報道に、台北慈濟病院で「医療の事前指示書」を最初に署名した人たちの中に、慈濟ボランティアの朱文姣（ジュ・ウエンジアオ）さん

が含まれている、と紹介されている。肉親を何人も世話をした経験から、彼女は平然と死に向かい合う必要性を深く感じた。また、家族と死について話し合い、お互いの考え方や感じ方を理解し合っている。

話し合いという過程の価値は、お互いが一緒に生命の意義と価値を創造することにある。人間の命には限りがあるが、終焉前に人生という旅を振り返れば、悔いのない歩みを発見することができ、まだ、愛と善念を表現する機会も残されている。

健康な時に良能を發揮し、病気になった時に、前もって自分で如何にして人生を円満に終えるかを決めることで、誰もが生死教育をする講師になることができるのである。このようにして、昔から恐れられ、タブー視されてきた死は、意義に富む「善終（善い最期の迎え方）」に変わり、生きている者に、勇敢に日常に立ち向かう力を發揮させている。（慈濟月刊六五〇期より）

預立醫療照護諮商門診 Advance Care Planning	
社工師 Social Worker	楊智喬 Yang Chih-Chiao
社工師 Social worker	吳芳茜 Wu Fang-Chien

護理諮商門診 Care Planning	
醫師 Doctor	常佑康 Chang, Yu-Kang
護理師 Nurse	湯雅婷 Tang, Ya-Ting



●台湾では、「患者自主権利法」の成立後、診察・相談・署名・登録通知の手続きを経て、自分の選択した医療方法を健康保険カードに登録することができるようになった。

一 主題報道 一

患者自主権

安らかな生と死

台湾で施行三年目を迎える「患者自主権利法」は、患者の医療自主権を中心理念とするアジア初の特別法だ。同法の制定は、命と尊厳に関するより活発な対話を生み出し、また家族が互いによく理解し合い、生命が終わる辛い瞬間を円満で思い残すことなく迎えることの大切さにも気づかせてくれた。

©文・李姿煌 撮影・蕭耀華 訳・有田夏子

世

界では三秒に一人が認知症と診断されている。また台湾のがん患者統計から計算される「がん時計」も年々時間が縮まり、現在は四分間に一人が、がんを発症している状況だ。高齢化や少子化の問題も深刻化している今、人生の最後に深くかわかる「患者自主権利法」に関心を持ち、また人生の必修科目である「善終（善い最期の迎え方）」についてよく考えることの重要性が、これまで以上に高まっているのだ。

台湾の桃園県に住む林美榕（リン・メイロン）さんは二十年前に胃がん末期と診断され、手術で胃と胆のうと脾臓を切

除した。治療後は、病気を抱えたままホスピス病棟のボランティアになり、自身自身の経験を生かして重病患者やその家族に寄り添っている。

そのような経験を経た彼女は、「ホスピス緩和・生命維持医療の事前選択意向書」（DNR、通称「蘇生措置不要同意書」）に署名し、将来自身の命が終わる時に人工的な延命措置を取らないことを選択していた。また「患者自主権利法」の施行後は、夫と共に台北慈濟病院に行き、「医療事前指示書に関する相談」（ACP：アドバンス・ケア・プランニング）を経て「医療事前指示書」（AD：アドバンス・

デシジョン）に署名し、いつ訪れるのか分からない人生の終わり方について事前の準備を整えた。

ホスピスケア基金会在二〇二〇年十月に発表した調査結果によれば、「最期まで蘇生措置を行うべきだ」という台湾の伝統的な医療理念に少しずつ変化が起きており、末期患者に対する臨終前の延命措置については約七割が不要であると回答している。また、死への関心が十年前の調査時よりも高まり、重病で余命が明らかになった時のことについては、五割の回答者が残された日々の過ごし方を自分で決めたいと答え、九割七分の回答者

が事前に遺書を残すことに賛成すると答えている。だが一方で、そのうちの六割の回答者が実際には何の行動も起こしていないことも示されている。

台湾は一九九〇年という早い時期からホスピス緩和医療を推進しており、世界で最も早くホスピス緩和医療を施行した地域の一つであった。そして「ホスピス緩和条例」施行から二十年を経た二〇一九年一月、「患者自主権利法」が台湾で施行され、患者の医療自主権を中核としたアジア初の法律が成立した。同法によれば、満二十歳以上で行為能力を有する人なら誰でも、医療機関の

相談チームによる「医療事前指示書に関する相談」を経たうえで、「医療に関する事前指示書」に署名することができ。そうすれば将来、五種類の法定臨床条件にあてはまる状況になった時、重要な医療事項を自分自身の意思で決定することができるのだ。

身体が思いどおりにならなくなった時

この二年間では、台湾の著名な作家で

●台北慈濟病院の「心連病棟（ホスピス病棟）」前の廊下では、静かな雰囲気の中で、ときおり焦燥感が入り混じる。多くの不安や未知に直面する末期患者の家族が、医療スタッフに小声で相談していた。

ある張曼娟（ジャン・マンジュエン）さんとベテラン芸能人である譚艾珍（タン・アイヅン）さんが、それぞれ両親と娘に付き添われて病院に行き、医療事前指示書に関する相談と署名を行った。また作家の龍応台（ロン・インタイ）さんも署名を行い、その時の気持ちなどをSNSで発表した。これらのニュースは、いずれも同法に対する人々の関心と議論を呼び起こした。

もしかすると、一般の人は「患者自主権利法」の主旨には賛同するけれど、「自分には関係ない」と考えているかもしれない。



健康な時に無常を感じることは難しい。自分が倒れた後の医療費や保険金の問題を気にする人は多いが、「どんなふうに扱われたか」という医療処置の問題について思いを巡らせる人は少ない。そのため、いざ自分が倒れて重要な医療措置を決定しなければならなくなった時、すでに自分の思いどおりにならぬことが多い、重要な決断を全て家族に委ねることになりやすい。医療技術の進歩によって、治療のためのお金や薬がないというかつてのような苦境は台湾ではもうあまり見られなくなった。その代わりに聞こえてくるのは、「終わりをたくても



患者自主権利法

- 2019年1月6日施行。
- 終末医療における患者の知る権利、選択する権利、決定する権利を保障することを主旨とした台湾初の「善終（善い最期の迎え方）」特別法で、「ホスピス緩和医療条例」に続いて定められた。
- 志願者は意識がはっきりした健康な時に「医療事前指示書に関する相談」を受け、「医療事前指示書」に署名することで、将来において末期患者、不可逆性昏睡状態、永久植物人間状態、極めて重度な認知症患者及び担当部署が公示する疾病など5種の特定臨床条件にあてはまる状況が発生した時、延命治療や人工栄養法、経管栄養補給などの措置を受け入れないことを選択し、「善終（善い最期の迎え方）」が可能となる。

終わらせてくれない」という声だ。

また、「善終（善い最期の迎え方）」について事前に家族とよく話し合っておかなければ、チューブを抜いて治療を停止するかどうかという選択を迫られた時、家族は倫理と感情の板挟みという苦しい思いをすることになる。また家族との間で共通の認識が得られなければ、愛情の破綻や対立を生むことになる。そのため、「命に関することは自分自身が決め、効果のない医療措置による苦痛を回避したい」という理由以外にも、「家族に決断の苦勞をかけたくない」という理由で相談に訪れる人も多い。

「患者自主権利法」を主に推進してき

療を受け入れるかどうかという決断は、実は誰にでも訪れうる課題なのだ。彼女は医療不足と医療過剰はどちらも医療倫理にそぐわないものだと考えている。「善終（善い最期の迎え方）」とは何か」というテーマは、私たち皆が取り組むべき人生の重要課題なのである。

家族のサポートの必要性

「患者自主権利法」の施行から二年経った二〇二〇年十二月初頭までに、台湾全土で約二十万人が「医療事前指示書」への署名と健康保険カードへの登録を済ませた。だが一般人や医療スタッフを含め、

た楊玉欣立法委員、そして彼女の夫である台湾大学哲学科の孫効智教授は、長年にわたって医学倫理と生命教育に力を尽くしてきた。メディアで「難病の天使」と呼ばれた楊委員は、自身も三好型筋ジストロフィーの患者だ。これは筋肉が次第に萎縮して全身麻痺に至る病気で、病状には身体器官の衰弱も伴う。そのため、いかに生き、いかに最期を迎えるかということは、彼女の一生にわたる関心事なのである。

自身も難病患者である彼女は、自分と似た症状を持つ患者や彼らが臨終前に直面しうる困難に特に注目している。だが臨終前に苦痛を増加させるような延命治

「患者自主権利法」の内容についてあいまいな理解しか持っていない人は依然として多く、診察相談の利用のしやすさの改善が待たれる。

現在、台湾全土の一八〇を越える病院で「医療事前指示書に関する相談」サービスが提供されているが、利用にあたっては電話やインターネットでの事前予約が必要で、多くの病院では週に一、二回の相談診療時間が設けられているだけである。一回の相談には六十分が必要で、少なくとも一人の二親等以内の家族が付き添い、二人の立会人が立ち合い署名をしなければならない。また健康保険の範

囲外であるため、患者は全額を自己負担しなければならぬ。これらのさまざまな要因が、相談サービスの利用や署名への意欲に少なからず影響を与えている。

政府は特定集団に対する補助や無料相談を提供しているが、それでも使用頻度は少ないままだ。台北市立聯合病院ソーシャルワーク室の楊君宜（ヤン・ジュンイー）主任の分析によれば、台北市立聯合病院（七院の合計）における二〇二〇年七月までの三千例の相談者のうち、心身障害者、重病患者と高度障害者、中・低所得世帯、認知症患者、独居およびホームレスなど無料相談を受けられる集団に属



●台北慈濟病院の「心蓮病棟」には仏堂と祈禱室が設けられている。患者は人生の最期を迎える時、身体のごとく医療チームに任せるが、心は信仰の導きを必要としている。

人で、人口全体の十六％を占めている。また台東県東河郷における比率は二十二・五％にも上

する人々はわずか十八％だけであったという。またそのうち中・低所得者に至っては、八十八名しかいなかった。

台湾における高齢者人口は三百七十万

る。東河郷にある都蘭診療所の頼璋伶（ライ・ウェイリン）医師によれば、医療事前指示書に関する医療相談と署名に対応しているのは台東県全体でも三カ所の病

院のみであり、将来的には「在宅相談」や「在宅終末医療」の推進が必要になるであろうという。

台湾全土には三百六十八の郷・鎮・市區という行政単位があるが、中でも最も高齢化が進んでいるのは新北市平溪区で、二〇二〇年五月の内政部の人口統計による高齢者人口比率はすでに三〇%を超えている。慈済の医療ボランティアチームは長年にわたって平溪区で施療・往診サービスを行っているため、当地の高齢化や独居老人の現実や問題をよく理解している。

二〇二〇年三月、台北慈済病院は平溪保健所での「医療事前指示書に関する相

いる。台湾においては、「患者自主権利法」の理念を引き続き紹介し、宣伝して広めていくことが必要である。死を語ることをタブーとせず、家族と「善終（善い最期の迎え方）」について話し合い、医療事前指示書に関する相談に参加することは、出だしの一步にすぎない。前述の相談費用というハードル、相談診療の利用のしやすさ、政府による宣伝などの課題を克服する必要があるほか、医師の患者とのコミュニケーション能力や終末医療に関する知識と能力、ホスピス病棟の病床数、在宅医療および在宅終末医療などの構造的な課題について、社会の各界が

談」に関する支援を開始したが、費用の問題や人々の考え方が保守的であることなどの原因で、予約に訪れる人はまだいない。近年、「患者自主権利法」を推進してきた台北慈済病院の常佑康（チャン・ヨウカン）医師によれば、平溪区に九十歳を超える老人が「医療事前指示書」に署名したいと言っているが、家族が事前相談に同行することができず、その望みは叶えられていない。

「善終（善い最期の迎え方）」という概念は広く受け止められ、支持されているが、その具体的な実施内容や細部の理念、実務上の解釈については意見が分かれて

より注目し、議論していくことが必要であろう。

「平和で安らかな最期は不可能ではないのです」。ある「患者自主権利法」に関する座談会で、楊玉欣委員がそう強調した。「そうでなければ、命が無意味で不条理なものになってしまいます」。彼女は「患者自主権利法」が「善終（善い最期の迎え方）」を自分で選ぶべきこととなり、また、人々が命の終着点を考えることで愛という出発点に立ち返ることを願っている。（参考文献：ホスピスケア基金会、台湾生命教育学会患者自主研究センター）（慈済月刊六五〇期より）

無常が来るまでにこの瞬間を生きる

朱文姣さんは無常によって苦しみ、無常によって悟った。
家族に次々と先立たれたが、その最後を看取るたびに教えられた。
大切なのは命の長さではなく、今この瞬間をしつかりと生きることなのだ！

雨

風の吹きすさぶ夜、鉄柱と木の板で作られた二段ベッドの上段で眠っていた少女は、泣き声と揺れに驚いて目を覚ました。その声は屋外で荒れ狂う風の音や屋根を激しく打ちつける雨の音よりも、いつそう少女の不安を掻き立てた。ベッドの下段で母親が病気の兄に覆いかぶさり泣いていた。兄が他界したのだ。

夜が更けるにつれ、雨風も泣き声も次

第に収まっていった。愛する家族が亡くなっても、家が貧しくて葬式を出すこともできない。せめて兄が瞑目し、早く埋葬するために、母親はあちこち奔走してお金を借りようとした。

母親は指輪を質に入れたが、それでも足りない。しかたなく末っ子を養子に出してようやく資金を調えた時は、兄の死から既に二日が経っていた。その間、兄

の遺体は取り外したドアの上に横たわっていた。血の気の無い兄を眺める少女の悲しい胸のうちに、命に対する疑問が湧きおこった。

兵役を終えたばかりの異父の兄はまだ二十五歳で、家計を助けるために仕事を探していた矢先のことであった。母親は兄が結婚して子供を産むことを望んでいたが、死が全ての希望を粉々に砕いてしまった。兄は退役後に尿毒症の診断を受けたが、お金がないため病院で治療を受けることができなかった。「病気が良くなったら、弟や妹たちの世話をしてあげる……」。お母さん、死にたくないよ！お金を借りてくれたら、医者に診てもらえるよ！」少

女は、兄が約束して、母親に懇願し、何としても生き延びようとした様子が思い起こされた。若くて親孝行で、これほど生を望んでいた兄が、果たせない約束を残してこの世を去ってしまった。
「生死とは何か」をまだよく知らない少女にとって、この命の無常と非情さは到底受け入れられるものではなかった。生きることにはどんな意味があるのだろうか？少女の心にそんな疑問が湧きおこった。

一杯の麺で家族を支える

少女の名は朱文姣（ツウウ・ウェンジャオ）。十人兄弟のいる家は貧しく、



朱文娟さん
65歳、台北市在住。
2019年2月19日、
慈濟台北病院における
「医療事前指示書」の第
1号署名者となった。署
名前の相談診療には娘と
娘婿が付き添い、娘が立
会人の一人になり、そし
て娘婿が医療代理人を務
めた。これにより、将来、
朱さんが「患者自主権
利法」に定める5大臨床
条件にあてはまる状況に
なった場合、本人の意向
に基づく治療が行われる
ことになる。

長期にわたり借金を抱えていたため、上から三番目の彼女は幼いころから両親の商売を手伝い、幼い弟や妹たちの世話をしなければならなかった。母親の産後の療養に付き添っていたのは、わずか六歳の彼女だった。

中国大陸出身の父親は、没落した家を憂い、故郷に帰れない悲しみから志を失っていた。故郷が忘れられなかった父親はしばしば悲嘆にくれ、酒に酔っては大声で怒鳴った。幼い日の文娟さんの脳裏には、話を通じないにも関わらず、浙江語と閩南語で喧嘩を繰り返す両親の姿が深く刻み込まれた。お腹を空かせた大勢の子供たちを、酒浸りの父親一人で養

うことは難しかった。兄の他界は、母親の悲しみを更に深くした。

一人で苦勞を背負い込んだ母親を辛い気持ちで眺めていた文娟さんは、母親の負担を減らすために十五歳で学校を中退し、麵料理屋の手伝いに専念することを決意した。生活は苦しかったが、一家を助けてくれる親切な人にも出会った。境遇を知った大家さんがアパートの一階を店舗に改装してくれたお蔭で、文娟さんと母親は家族を養うことができたのだ。

当時まだ若かった文娟さんは、毎日、店で忙しく働いた。陽春麵もビーフンもお手の物。まだ、ガスが普及していなかった時代で、文娟さんが炭火を燃やしながら一杯、

また一杯とスープ麵を作ると、お客さんたちが屋台に置かれた小さな筒に二元を入れていった。学校に来なくなった文娟

さんを訪ねて、偶にクラスメートが店に顔を出すこともあったが、文娟さんがどうしてこんなに頑張っているのか、友達は

知っていたのだろうか？文姢さんにはそんなことを考える余裕もなかった。だが頑張ってお金を稼げば、家族によりよい生活をさせてあげられると信じていた。

文姢さんは十八歳になった時、母親の許可を得て服の販売を始めた。彼女は先ず、夜市と麵料理店で女性服と子供服を販売した。数年後、兵役を終えたばかりで三歳年上の黄振栄（ホワン・ジェンロン）さんと仲人を通じて知り合った。振栄さんは背が高く、思いやりがあり、暇さえあれば文姢さんの店を手伝ってくれた。すっかり意気投合した二人は、心の中でお互いを認め合うようになっていった。二十四歳の時、文姢さんは黄家

の長男の嫁となった。夫の家には娘がいなかったため、愛情深い夫に加えて、姑も彼女を可愛いがってくれた。

事業での奮闘、素敵な愛情、幸せな結婚。文姢さんは、兄があの時失った全てを手に入れた。だが一切が正しい軌道に乗るであろうと思えたその時、人生の無常に再び直面することになった……

病床に倒れる前の選択

結婚した翌年、文姢さんの父親が再び脳卒中で入院し、予断を許さない容体になった。医師からは、手術をしなければ助からないこと、そして手術をすれば命

は助かるが、父が「植物状態」になってしまうことを告げられた。

当時、家族の男性は全員が兵役中だったため、その重い決断は姉妹たちの手に委ねられることになった。姉妹は家族の情と孝心から、その時「最も正しい」と思われる決断をしたが、その選択は後に彼女たちを後悔させることになった。

十三年が経ち、彼女は二児の母親になっていった。ある旧正月の元日の夜、家の電話が鳴り響いた。それは義弟の嫁が心筋梗塞で入院したという知らせだった。文姢さんは義弟の二人の幼子の世話を引き受け、振栄さんは急いで病院に駆け付けた。

義弟の嫁はなんとか命を取り留めたが、脳内で酸欠を起こし、かつての父親と同じ「植物状態」に陥ってしまった。全身にチューブを挿入された彼女は、意識のない状態で病床に横たわっていた。

文姢さんは、病床で二週間持ちこたえた父親が他界した時、実はほっとしたのだと正直に語った。完全に動けない人をケアするのはとても大変なうえ、父親をこれほど辛い生き様に追いやったあの決断を後悔もしていたのである。

だが、こともあろうに三十歳を過ぎたばかりの義弟の嫁が、父親と同様の状況に陥ってしまったのだ。またしてものしかかる無常に直面した文姢さんは、生命の



意義について再び考えるようになった。

四十五歳になったその年、文姣さんは夫と一緒に慈済に参加し、人文真善美（記録）ボランティアと医療ボランティアとなった。それ以来、仕事をしない時間はいつもボランティアの予定で埋め尽くした。中学二年生で中退した学歴を気にしていた少女が、再びペンを手に取り、パソコンを学び、医療現場の実情を文字で記録していった。

患者のケアに参加するうち、彼女は自分と同じように無常に苦しめられている人の多さに気づき、彼らのために力を尽くしたいと考えるようになった。母親のこのような変化を目の当たりにした子ども

もたちは、人生の大半を苦労に費やしてきた両親を思いやり、「二人共そろそろ仕事を引退して、自分の好きなことに専念したらいよいよ」と言ってくれた。子どもたちの気持ちを知った文姣さんは、長年経営してきた洋服店をたたみ、全ての時間をボランティアにつき込むことにした。

仕事を退職してからの日々は、朝にテレビで證嚴法師の開示を聞くことから始まり、それから慈済台北病院でボランティアを務め、夕方の帰宅後には他のボランティアたちと読書会を開くというものだった。文姣さんや他のボランティアたちが切に願っていたのは、命を善く使い、よく学び、情熱と時間をボランティア活動に十分に生かすことだった。

老人の切なる願い

そのような日々が十年余り続き、文姣さんが五十八歳を迎えた二〇一四年、高雄でガス爆発事故が発生した。夫妻はボランティアチームと共に南部へ支援に向かい、その後、花蓮でのボランティア活動に赴いた。ようやく家に帰ろうとした矢先、義弟からの電話で姑の様子がおか

●朱文姣さんの人生は、家族との別れの連続だった。だが彼女はその悲しみに打ち負かされることなく、悲しみを共感に変え、そして他人の痛みに深く耳を傾けることができるようになった。



●命の喜びと悲しみ、出会いと離別を経験した黄振栄さんと朱文姣さん夫妻は、ボランティアになって互いに支え合い、日々をしっかりと歩んで、一瞬一瞬を大切にしている。

しいと聞かされた。夫妻は自宅に戻った途端、すぐに尿の臭いが鼻についた。年離れた姑は、自立した日常生活を送ることができなくなっていた。

医師の診断によると、姑は軽い認知症に加えてC型肝炎を患っていた。この突然の知らせは姑本人だけでなく、介護を担う家族の生活をもすっかり変えてしまった。病院に通うことが日常になり、姑は徐々に身体機能が衰え、食欲不振や昼夜逆転などの症状が現れたり、すぐに何かを忘れて家族に腹を立てたりすることが増えた。

ある日、文姣さんが姑をトイレまで支えていこうとした時、姑が突然失禁して糞尿が流れ出た。二人は足を滑らせて糞尿のなかに転

倒し、泣いた。他の家族は家にいなかったため、文姣さんはこの惨状に一人で対応しなければならず、身も心も疲れ切った。姑は自分を責め、思い通りにならぬい身体に直面して、とても悲しそうにしていた。このような日々は二年ほど続き、姑の永眠によって終わりを告げた。

文姣さんは、姑が亡くなる直前に突然、夜市の屋台料理が食べたいと言いだしたことを思い出した。すぐに買って準備したが、姑はもう何も食べることができない身体であり、喉を通った食べ物消化することも、排泄することもできなかった。

どんなに美味しい食事も、姑の身体には負担でしかなかった。文姣さんは誰よ

りもよく分かっていた。経鼻経管を抜いて欲しいという姑の願いに対しても、少しも迷うことはなかった。そして姑のために食べやすいものを用意した。一口、二口しか食べられないことは分っていたが、残されたわずかな時間に、常人にはささやかでしかないこの味覚を味わってほしかった。

姑はもう、死から目を背けようとはしなかった。ある日、文姣さんが「ホスピス緩和・生命維持医療の事前選択意向書」について誰かに紹介しているところを見て、姑はそれについて尋ね、末期医療における蘇生措置を放棄するための意向書であることを知った。

若くして亡くなった義弟の嫁の姿を思い浮かべた姑は、もう命の長さだけを求めることはしなかった。姑は文姣さんに署名したいとせがみ、文字が書けないので「拇印で！拇印で署名します！」と子どものように泣き叫んだ。

こんな風に別れを告げたい

「おばあちゃん、絵本を読んであげね！」姑の葬儀が終わったある日、孫娘が『おばあちゃんに会いたい』と言う絵本を文姣さんに読んでくれた。それは、亡くなったおばあちゃんを思う女の子の気持ちを描いた絵本だった。朗読する孫

娘の明るい声を聞いて、文姣さんは尋ねた。「もしいつか、おばあちゃんがこの世にいなくなったら、おばあちゃんのお葬式はどんな風にしたらいいと思う？」

「分からない……。」と孫娘は答えた。「お母さんにちゃんと伝えてね。おばあちゃんは、医学生のために遺体先生になるんだよ。それからおばあちゃんを燃やして、大地に撒いて欲しいの。そこから生えた樹の木陰で、みんなが涼めるように……。」

六十五歳を迎え、すでに法律上の「高齢者」となった文姣さんは、「命に関する大事なこと」について子供たちと折に触れ話し合うことにしている。「買って

きた花はともきれいでしよう。花は美しく咲き誇った後、しだいに枯れていくの。花が咲くのも枯れるのも、どちらも自然なことなのよ！」

文姣さんは自身の人生を振り返り、多くの家族に先立たれたが、彼らの最期を看取るうちに多くのことを感じ、悟ったという。別れは痛みを伴ったが、同時に命について考えさせてくれたことに感謝した。

文姣さんは自分の過去を振り返りながら、自身の生命観について言葉が続けた。「命とは、長引かせればいいというものではありません。命とは、あなたが大切にしてきたことの全てであり、生きてい

る瞬間を心から味わうことなのです」。

（慈済月刊六五〇期より）



●家族の励ましとサポートの下、朱文姣さん（前列左から3人目）はフルタイムの医療ボランティアとして自分のやりたいことに全身全霊で打ち込んだ。若い頃に身に付けた調理の腕前で、医療スタッフに愛と思いやりを届けている。

人は絶対に天に打ち勝つことができるのか？

アルゼンチンの新型コロナウイルス感染者数は、依然として世界の十位以内のままであるが、人々は既に外出禁止令に対して何も感じなくなり、経済と感染予防はバランスが取れていない。禁止令を緩和すると、感染者は増え、医療従事者のリスクが高まる…。

昨

年の二月、新型コロナウイルスがアジアやヨーロッパで猛威を振る

い始めた頃に真夏を迎えていた南米のアルゼンチンは、まだ空港での検疫を強化しておらず、保健相のヒネス・ゴンザレス・ガルシア氏は、新型コロナウイルス

よりも北部でのデング熱の方が心配だと話していた。

アルゼンチンで初めて感染が確認されたのは三月初め、イタリア旅行から帰国した四十三歳のブエノスアイレスの市民が最初のケースだった。三月八日に慈済

ボランティアがブエノスアイレス州モレノ市で貧困家庭の児童へ文具の配付を終えた時は、喜びに顔をほころばせる児童たちを見て、間もなく始まる新学期に希望を抱くことができた。しかし、新学期が始まって僅か数日、新型コロナウイルスの感染拡大により学校は休校となってしまう。感染は他の州にも広がったことから、三月十九日にアルベルト・フェルナンデス大統領が、アルゼンチン全土に二十日から月末まで、民生必需品を販売している店以外は営業を停止することをはじめとした外出禁止令を出したのだ。

一日過ぎただけで、人で賑わっていた

ブエノスアイレス市は突然、静まり返り、人々を狼狽させた。そしてたまたに買い物で外出する時でもマスクの着用が義務付けられ、一・五メートルの距離を保って並ばなければならなくなった。

外出禁止令は二週間だったが、更に二週間延長され、それが今日まで続き、既に八カ月余りが過ぎた。ウイルスが消滅するどころか、感染者数は三桁から四桁になった。店や工場の営業再開に伴って、感染者数は五桁まで膨れ上がり、連日、感染者数が世界で四位になった。感染者数は依然として世界で十位以内に留まったまま、十月下旬には百万人を超えた。



長期的な外出禁止に対して、人々は何も感じなくなり、生活のために感染リスクを覚悟して仕事に出かけることを余儀なくされた。経済と感染拡大防止のバランスが保てなくなり、貧困者は益々増えて三食もままならなくなり、頻繁に抗議デモが起きた。政府は救済措置を取ってはいるが、焼け石に水で効果を発揮することができないでいた。以前は友人同士お互いに健康を気遣い合っていたが、現状に慣れてしまうと、感染を恐れる気持ちが生まれ、自分中心か、無関心になるか、自分のことで精一杯になってしまつて他人を気にかける余裕がなくなつ

てしまった。

突然襲いかかってきた新型コロナウイルスに対して為す術もなく、病院では医療物資が不足したが、アルゼンチン航空の輸送により海外から物資を獲得しようとする以外、どれほど工場を精一杯動かしても需要に供給が追いつかない。世界各国の状況を予見した慈悲深い證嚴法師は、アルゼンチン支部が医療物資を必要としているのかどうかを把握するよう、本部の職員に指示した。支部は、アルゼンチン参議院のマーティン議員の協力の下、ブエノスアイレス大学と連絡をとりながら、四月初旬から七月末の数カ

月間という長い時間を経て、ようやく医療物資を受け取る事ができた。

●130年余りの歴史があるムニーズ病院は、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスにある伝染病治療専門の医療機関であるため、多くの新型コロナウイルスに由来する肺炎患者を治療している。8月中旬、当病院は、慈済と共にこの難関を乗り越えようとして防護服やパルスオキシメーター等の物資を届けられたことに感謝した。

終わりの見えないコロナ禍では、その医療物資がいつ届いても、全て最良の時期であり、歓迎されるのである。私たちが、ブエノスアイレス大学付属のサンマルテン病院のマルチェロ・メロ院長を訪ねた時、彼は、「十台の呼吸器で十部屋の病床を増やすことができる以外、N95マスク、医療用マスク、防護服、保護ゴーグル等全て、法師と世界中の慈済人の愛と祝福が詰まったものです」と心から感謝した。

政府は、七十歳以上の人は免疫力が低下しているため、できる限り外出しないよう呼びかけた。そういう規定があるため、多くのボランティアは通行証を取得

気にかけてくれるなど、医療スタッフは思ってもいなかったそうだ。物資を届けたその日、一人のスタッフが、「防護フェースシールドが使えるようになる！」と喜んだ。この言葉を聞いたボランティアは、心を痛めながらも、同時に適時に届けたことが嬉しかった。

変化のきっかけを逃さないように

ヨーロッパで新型コロナウイルスの感染が拡大した後、ドイツで働いている娘のことが心配だった。普段は心配の要らない子だが、親の目から見ると、子供は幾

することができず、静思語の「善行は機を逃さず、縁も大切にしなければならぬ」という言葉が深く心に刻まれた。普段はそれらを惜しむことなく、感染症が広がるも縁もなくなり、残念な結果に終わってしまう。

外出禁止令の中、医師たちが感染から身を守り、リスクを抑えながら、安心して患者を助けることに専念できるよう、ボランティアたちは精一杯愛を届け、自らの手で数多くの病院に医療物資を届けた。ペナ病院はブエノスアイレス市と州との界にあるので都市から離れているため、慈善団体が彼らの病院のことを

つになっても子供であり、特にこのような状況の時は尚更である。彼女はとても気骨があり、食生活から自分を守ることを始め、コロナ禍でベジタリアンになって毎日豆腐や野菜、きのこ類などを楽しく食べているようだ。彼女にこのような慈悲心があることが何よりも嬉しく、遠く離れていても安心して見ていられるようになり、私たちは気持ち晴れた。

突然の外出禁止令により、全てが静まり返り、仕事のストレスはもうない。台湾から持ってきた野菜の種は芽を出し、今までになかった田園生活を楽しんでいく。コロナ禍で外出しない代わりに、野

菜を育て、採れたての野菜をいつでも調理するという生活だ。そして、このような状況の中でも慈済は、日頃からケアしている弱者家庭や他の団体と連絡を取り続けている。外出禁止令が徐々に緩和されると、食糧を梱包し、それを必要としている人たちに通行証を申請して、連絡所に取りに来てもらった。

新型コロナウイルスは手綱が切れた野生の馬のようで、政府はこれ以上の対応策がない。組合が要求している経済補助も満足に提供することができず、各州で集会や抗議デモが起きている。私たちは毎日、オンラインでボランティア朝会に参加して折り、人々の心が落ち着いてく

れることを願うばかりである。

十一月になっても、南米での第一波コロナ禍は未だ終息が見えず、ヨーロッパでは第二波が始まり、猛威を振るっている。新型コロナウイルスは世界を覆い、人々の日常を変えてしまったが、人類は天に勝つことができるのだろうか？人類は欲望と無明によって生態系を破壊し、動物を屠殺し、環境を汚染してきたため、地、水、火、風の四大元素のバランスが崩れ、天災が絶えない。新型コロナウイルスは、人類に懺悔の機会を与えようとしているのだと言える。すべては人類がこの大いなる教育を受け入れるかどうかにかかっている。(慈済月刊六四九期より)



新型コロナウイルス感染拡大地域にて

文・張素雲（北トロント慈済ボランティア） 訳・心嬖

慈悲が勇気をもたらしにくれる

病院から遺体を載せたストレッチャーが押されてきたり、高齢者施設の年配者が近づいてきたりすると、月群さんは恐くなってその場から逃げ出したくなる。しかし、薄っぺらな防護服を身にまとった医療スタッフの姿を見て、また、長い間、行動制限されてきた孤独な高齢者のことを思うと心が痛み、直ちに心から同情を寄せる気持ちになる。

お 金を稼ぐことが人生の目標だった
甄月群（ジエン・ユエチュン）さん

は、二〇〇〇年に故郷の中国を離れて中央アメリカのベリーズに渡り、一生懸命働いた。ある日、友人からもらった慈済

の月刊誌を読んで心を動かされ、現地の貧しい人への支援を少しずつ始めた。し

かし、ベリーズには慈済の拠点がなく、中国の広州に戻ってからようやく慈済に参加した。その後、二〇一五年八月にカ

ナダのトロントに移住した甄さんは、直ちに慈濟北トロント支部に連絡を取り、やっと念願が叶った。

甄さんは直ちにボランティアになりたいたいと思っていたが、ベテランボランティアの後ろについて慈濟の活動をするうちに、「見返りのない奉仕」とはどういうことかを学んだ。カナダという恵まれた土地で暮らしていると、益々、自分が幸福な人生を歩んでいることを感じた。ところが昨年三月十八日、コロナ禍で町はロックダウンされ、甄さんと夫は二人とも失業して家にいた。七月になって二回目のロックダウンが解除され、やっと仕

「実に不思議なことです。私はコロナ禍の前から夫をよく読書会に誘いました。夫は時間がないとか、興味がないから君だけ参加すればいい、と言うだけでした。しかし、町がロックダウンされてからは毎日、私と一緒に『法華経』を拝聴するようになり、朝の礼拝も欠かさず、また、さまざまなオンラインの養成講座も一緒に勉強するようになりました」。證嚴法師のお諭しと甄さんの努力で、家族にこのような不思議な縁をもたらしたのである。

甄さんは家でオンラインの勉強をするだけでなく、黄淑芳（ホワン・スーフオン）

事に戻ることができた。その間、政府から緊急給付金が支給され、暮らしを維持することができた。彼女は、自分が正しい移民先を選択したことに感謝した。

政府は何の前触れもなくロックダウンを発表したため、一時期、買い出しをする人たちでパニック状態になり、甄さんは買物へ出かけるといつも不安でたまらなかつた。四月から彼女は、慈濟五十四周年のイベントである『法華経』の勉強会に参加し、オンラインで全世界と同時に精進したところ、思いも寄らず、心の安らぎを得る妙法を見つけた。そこで、夫と三人の娘にも参加してはどうかと誘った。

姉姐（スージエ）の誘いで、四月から全ての防疫物資の配付活動に参加した。例えば、家庭内暴力防止センターのために物資を買い付けた時は、五十人分のシャンプーや日用品を揃えるために、数え切れないほどのスーパーマーケットを駆け回った。また、最前線で働く医療スタッフを保護するため、慈濟北トロント支部の防疫物資の配付活動に合わせて、彼女と支部のボランティアは心配しながらも勇敢に任務を果たし、途切れることなく、十六回の配付活動に参加した。四月から八月中旬まで、北トロント支部は、三万個余りのマスクと千四百個のフェースシールド

及び八百着の防護服を寄贈した。

その一方で甄さんは、感染状況が深刻化する と病院や介護施設に行く時はいつも戦々恐々としていた、と正直に語った。それでも、記録ボランティアを担当していた甄さんは、歯を食いしばってカメラを手に、前進した。四月にマッケンジー病院 (Mackenzie Health) に防護服を寄贈しに行った時のことである。車を完全に駐車させる前に、二人の医療スタッフが収容袋に入れた遺体をストレッチャーに乗せて出てきたのを目にした。その光景は甄さんにショックを与え、心の中でひたすら「阿弥陀仏！」と唱え続けた。「も

し、他の師兄や师姐が同行してくれていなかったら、或いはここ数年間慈済に参加していなかったら、直ぐさま家に逃げ帰っていたかもしれません」と彼女は言った。心に恐怖を感じながらも、慈悲心が起きた。マスクだけを着けた医療スタッフを見て心が痛み、彼女は慈済人としての使命感を感じて任務を果たしたのだった。

またある日、院内感染で死者が出たベサニーロッジ (Bethany Lodge) 高齢者介護施設に行った時、スタッフがボランティアに、物資を受付カウンターへ届けるよう言ったので、狭くて換気が悪



い通路施設内で手続きが終わるのを待っていた。すると、ある高齢者が無意識に進入禁止区域から出て、ボランティアの方に近づいて来た。甄さんは動転して、後ずさりしながら、「来ないで！来ないで！もし私が感染したら家族はどうなるの？」と頭の中で複雑な思いが交差した。それを思い返すと、あの時の自分の行為はまるで、『心経』の経文である「顛倒夢想」（愚

●6月中旬、慈済ボランティアは部屋に閉じ込められた金星高齢者アパートの居住者の心を癒やそうと、屋外の芝生でコンサートを開いた。(撮影・梁延康)

かな迷い)のようなものだった、と苦笑
いた。

だが、この時期に嬉しいこともあった。
慈済ボランティアは五月と六月に、金星
高齢者アパートの住民たちのためにユ
ニークな野外コンサートを催した。五月
の時、甄さんは三人の娘を連れて行った。
そのアパートは慈済ノーストロント支部
が長年ケアしてきた施設だが、ロックダ
ウンの後、高齢者たちが部屋に閉じ込め
られ、家族さえ訪問に来ることができな
かった。彼らの寂しく落ち込んだ気持ち
は察して余りあるものだった。

三十分間のコンサートは慈済の楽曲の
くした」。甄さんは慈済に対する気持ち
を蓮の花の伝説に喩えた。「私はまっし
ぐら慈済に向かって来ました!」。長年
に亘って蓄積されたものが、遂にノース
トロントで開花し、念願が叶ったのだ。

甄さんは二十歳の時から仏教を学ん
できたが、人生の前半を中国の広州とベ
リーズで過ごし、その後、トロントに落
ち着いた。二〇一五年に慈済ボランティ
アの研修を受け始め、二年後に認証を授
かった。慈済に参加して得た最大のもの
は和やかな家族の繋がりにある。「私に
とって、夫と子どもは、善知識(先達)
のような存在です。たまに忙しくて祈る

メロディーとフルートの音が辺りに満
ち、高齢者が窓際で踊り、下の階にいた
ボランティアに手を振った。その出会い
はお互いに距離があっても、心はとても
近かった。

心に咲く蓮の花

こんな美しい伝説がある：「蓮華の池
で花がポツポツと開き始め、次の日には
前日の二倍の花が咲いた。それから蓮の
花は毎日、前日の二倍咲くようになった。
二十九日目、花の数は池の半分を覆いつ
くし、三十日目になると、池中を埋め尽
のを忘れると、彼らが教えてくれるので
す!」。

彼女の二人の子供は既に慈済青年部
に所属し、姉の甄玉蓮(ジェン・ユー
リエン)さんと姪の甄娟娟(ジェン・
ジュエンジュエン)さんも、彼女の勸
めで慈済委員になった。そして、夫も
慈誠養成講座に通っている。コロナ禍
で、彼女は菩薩道を歩む決意が一層固
まった。カナダで慈済の一員になって
過ごしてきた日々の慈悲喜捨は、三十
日目に池いっぱいに広がったあの蓮の
花のように、彼女の心を満たした。

(慈済月刊六四九期より)



食糧危機には農業で自力更生

食糧を輸入に頼っているモザンビークにとって、コロナ鎖国は耐えられない打撃と言えよう。中部のメトシエラと南部のマプトにある二カ所の大愛農場では、収穫した農作物を地元の貧困者と分かち合っている。コロナ禍が発生して以来、物価が高騰した間も、農作物で人助けができることを、貧しい農業ボランティアは誇りに思っている。「私たちは力と愛を持っています！」。

一一〇二〇年七月、モザンビーク中部のメトシエラ (Metu-chira) 大愛

農場では、慈済ボランティアたちは手が回らないほど忙しく、一部のボランティアは籠に入った収穫したばかりのトマト

を整理し、もう一方、他のボランティアたちは野菜が入った竹籠を頭に載せて列を作り、リーダーのパウロさんの後について、ケア世帯の家に向かった。この大愛農場で既に二回目を迎える収穫は、こ

のように大豊作だった。

モザンビーク中部ソファアラ州メトシエラ町は、二〇一九年の時にサイクロン・ダイ風災で被災した。この一年間、慈済の再建計画は途切れることなく続けられ、それまで以上に多くの地元住民が大愛の列に参加するようになった。パウロさんはメトシエラ町の慈済の一粒目の種子である。

彼の話では、サイクロン・イダイ風災後、最初にやって来た慈善グループが慈済だった。彼は慈済がボランティアを募集しているのを見て参加した。慈済委員の蔡岱霖（ツアイ・ダイリン）さんが話した證嚴法師の物語を聞いて、深く感動

した。特に海外の慈済人が「自力更生し、現地で発展させる」考え方が彼を大いに啓発した。それによって、彼は自主的に慈済のためにメトシエラで二ヘクタールほどの農地を見つけ来て、大愛農場にした。更に農場を耕すために、昨年三月からメトシエラ町で千人を超す人を集めた。僅か三カ月の間に、ボランティアたちは愛を込めて心して耕した結果、メトシエラ町で最大の農園となった。

お金のためではなく、愛のため

「以前の私は友人を必要とせず、他人



●メトシエラ大愛農場のボランティ
アは無給だが、千3百人が交替で農
耕している。物価が高騰し、貧しい
人は物が買えない。しかし、農業は
いつまでも人々を助けることがで
き、ボランティアたちに無限の希望
を与えている。

済の話の人々と分かち合い、
住民たちに善行するよう呼
びかけている。二十五人以
上の集まりを制限する政府
の感染予防策に従って、パウ
ロさんは千人余りのボラン
ティアのシフトを組むこと
を手伝っている。二十五人
ずつ、午前中のチームは草

のことには構わず、近所の人に会っても
笑顔を見せませんでした。心を開いて慈
済を受け入れてから、私は楽しくなり、
笑顔を浮かべ、善意でより多くの人を助
けるようになりました」。以前は無口で
減多に笑顔を見せることもなかった、こ
の背の高い痩せぎすで恥ずかしがり
やの男性は、既に二十七歳で、二児の父
親でもある。

パウロさんは十七歳の時、両親が亡く
なって、長男として、三人の幼い弟や妹
の面倒を見なければならなくなったが、
一番下の弟は僅か七歳だった。パウロ
さんは彼らのために勉学を続けることが

できず、臨時雇いで生計を立て、辛い生
活をしてきた。そのような貧しい生活で、
ボロボロの茅葺の家に住んでいたら、楽
しいわけがないのは容易に想像でき、他
人の生活に関心を寄せるはずはなかつ
た。しかし、「證嚴法師の教えで私の人
生は変わりました。以前、年配の方が苦
しんでいるのを目にしてもまったく無関
心でした。今の私は、人を助け、近所の
人に寄り添って、積極的に彼らの問題を
解決してあげています」と言った。

パウロさんは毎日一時間ほど歩いて農
園に行くが、どんな天気でも休んだこと
はない。彼は、町の各集落に行つて慈

取り、午後のチームは水やり作業をして、全ての人に奉仕するチャンスがあるようにした。すると、僅か数カ月間に、ボランティアとして農園の手伝いをした人の数は延べ五千人を超えた。

パウロさんに、無給なのになぜそんなに熱心に農場の仕事に取り組むのかと聞くと、「お金のためではなく、愛のためですよ」といつものように、恥ずかしそうな笑顔を浮かべて答えた。

新型コロナウイルスの感染が拡大し、モザンビークの大統領は四月に六カ月間の非常事態宣言を発令した。そのような対策は感染拡大を阻止するためではある

ボランティアたちはトマトと野菜を竹籠に詰めて、メトシエラ町の貧しい家庭を訪問し、一軒一軒それを届けている。昨年十月末までに延べ三千六百世帯が恩恵を受けた。

ボランティアたちは奉仕する中で、證嚴法師が常に教えている「施しをする人は受ける人よりも幸せだ」という喜びを体得した。「慈済に感謝しています。たとえお金がなくても、力と愛さえあれば、人助けができることを理解しました」とツリンナーさんが言った。今年三月にサイクロン・イダイ風災一周年の祈りの会で、ボランティアが演出した「七種類の

が、多くの会社を倒産と人員削減に追いやることにもなった。その中で最も影響を受けたのは、臨時雇いで生活している貧しい人たちだった。いくつかの家庭は健康と生計を考慮して、庭師や女性の労働者を辞めさせた。コロナ禍で、農業の日雇いの仕事を失って、収入が途絶え、節約して暮らすしかない、と地域ボランティアも言っている。ある地域のケア世帯によると、感染が拡大し始めてからは朝食を食べなくなったそうだ。

農園に来る千人余りのボランティアは皆地元の人で、貧困者が何処に住んでいるのかよく知っている。収穫が終わると、

お金がかからない奉仕」と言う劇を見た後、人助けが金持ちの特権ではないことを悟った。そこで、パウロさんがボランティアを募集していた時、ツリンナーさんは直ちに承諾し、積極的に参与するようになった。

近年のモザンビークは干ばつが酷く、偏境の農民たちはもっと厳しい食糧問題に直面し、メトシエラ大愛農園も大きな試練に遭っていた。冬季の降雨量が少なかつたため、元来大愛農園脇を流れていた小川も五月に干上がってしまった。ボランティアは農園の近くにある井戸から灌漑したため、数カ月後には豊作となった。



愛の農園を続けるため、ボランティアたちは自主的に水源が確保されている別の農地を見付け、自分たちが行なっている話をして農場主を感動させたため、皆が耕作できるように、と無償で提供してくれた。ボランティアは自分たちの家から種を持って来て、この新しい農地に撒き、将来の収穫でもっと多くのメトシエラ町の貧しい人々を助けられるよう願った。

見返りを求めない奉仕 豊作を祝う

「親愛なる證嚴法師様、私たちが撒いた種が芽を出しました。皆で力を合わせ

て耕した農園の成果をご覧ください」と、メトシエラ町から千二百五十キロメートル離れた南の首都のマプト (Maputo) 市で、多くのボランティアは大愛農園の野菜の豊作を祝って喜びと共に歌を歌った。

感染が爆発的に拡大した当初、モザンビークは物価が高騰した。マプトの慈済ボランティアは農園の面積を拡大するために荒地を開墾し、雨季の終わりまでに種を撒いた。今、目になっている一株一株の緑色の野菜は、自給自足できるばかりでなく、貧困者にも分けることができる。愛を込めて灌漑したボランティアたちは大喜びである。

大愛農園の物語は十分に宗教の力を具現している。心の愛が啓発されると、そのエネルギーは尽きることはない。モザンビークの人は純粹で善良だが、如何せん数百年の殖民地と数十年の内戦を経歴した後、人々は冷淡になってしまった。しかし今、慈済が彼らの生命に入り、心の底に沈んで久しい善念を徐々に呼び覚ましていく。

南部のマプトでも中部のメトシエラ農園でも、ボランティアはこれまでと同じ生活を続けている。どちらも豊かではないが、心は満ち足りている。心を入れ替えてから、彼らを待っていたのは、農業で自力更生するという斬新な人生であった。(慈済月刊六四九期より)

●メトシエラ大愛村の建設予定地に住んでいるマリアおばあちゃん、パウロさんとボランティアが、いつも新鮮な野菜を持って来て、長期にわたって寄り添ってくれることに感謝した。

数字が物語る野菜と果物の健康効果

ケダ慈済人工透析センターでは、コロナ禍の期間中、毎週土曜日、患者たちに無料の菜食弁当を提供し、齋戒を呼びかけている。すると五〜八週間後、予想外の結果が得られた。野菜を多く食べて肉を減らしたことで、腎臓病患者たちの高リン血症が改善したのである。血液検査の数値が彼らに、健康のために努力し続ける勇気を与えている。

マ

レーシア北部のケダ州に住む陳漢彬（チェン・ハンビン）さんは、

遺伝性の糖尿病を患ったことで左足を失い、腎不全にかかり、そして失明した。心にも身体にも大きな打撃を受け、まるで自分が廃人になってしまったかのよう

に感じ、一度は自ら命を絶とうとしたこともある。ケダ州慈済人工透析センターで治療を受けた後、命が長らえたことは嬉しかったが、慈済は仏教組織だと聞いていたので、こんな疑問が心に浮かんだ。「菜食者にならなければ、透析はしても

らえないのだろうか？」

不安な気持ちで来てみたところ、そこでは菜食が義務付けられているわけではなく、ただ互いを尊重するために、菜食以外の食事の持ち込みが禁止されているだけだと分かった。それで、安心して無料の透析治療を受けることができた。また、看護師や他の患者やボランティアの人たちは皆、親切でやさしく、陳さんの気持ちを明るくしてくれた。「ボランティアの皆さんは、全身全霊で私たちを助けてくれます。ですから、私もちゃんと生きなければ、申し訳が立ちません。気持ちも少しづつ晴れてきて、多くの人と知り合いになれたことが嬉しいです」。

陳さんは透析治療を受ける時、よく大愛テレビの番組を見ていた。そこから證嚴法師の齋戒の意義についての教えを聞き、また看護師さんの熱心な勧めによって菜食のメリットを知り、菜食者になりたいと思うようになった。だが病気がかかってからは日常生活でさえ、家族に頼らなければならぬ状況になり、これ以上家族に負担をかけることは避けたかった。今年に入ってコロナウイルスの感染が拡大すると、慈済ケダ支部は腎臓病患者とその家族のために菜食弁当を提供し始めた。また、看護師の蘇志祥（スー・ジーシアン）さんと菜食を始める約束をしたことも、菜食との縁が築かれるきつ



● 菜食弁当が人工透析センターに届けられると、看護師たちは空き時間を利用して、予約した数量分を透析患者たちに配る。

心を持つ呼び水となることに期待した。

ボランティアや看護師たちは普段から腎臓病患者たちに菜食のメリットを伝えているが、思うような反応は得られていなかった。「マレー人には、菜食の概念がなく、菜食がどんなものか分からなかったのです」。「菜食をしたことがあります」。華僑やマレー人の腎臓

かけになった。そこで透析治療がある日はいつも弁当箱を持参して、菜食料理を家に持ち帰った。治療がない日は、同居しているお姉さんに料理してもらった。肉食でも菜食でも、「食」とは空腹を満たすことにすぎないと考えていた陳さんが菜食を決意したのは、生命を尊重したいという思いからだった。「證嚴法師は、一秒間に二千以上の命が、人間の食糧として殺されているとおっしゃいました。一分ではなく、一秒です！これほど多くの鶏や牛、羊を殺しているなんて、とても驚きました。それに菜食は健康のためにもよいのです」。

菜食を始めてから最も強く実感したの

は、毎日の便通が改善されたことだった。腎臓病患者は排尿量と体重によって飲み水の量を調整しなければならぬため、水分制限と食物繊維の不足により便秘になりやすい。血液報告書はずっと赤字がりぎりだったので、菜食によって数値に改善が見られることを期待している。

調理ボランティアの大挑戦

ケダ州慈濟人工透析センターは、證嚴法師の菜食呼びかけに感銘し、実業家ボランティアのサポートの下、四月五日から腎臓病患者と家族のために菜食弁当の提供を始めた。より多くの人が菜食に関

病患者たちに尋ねてみると、一様にこんな答えが返ってきた。これも看護師長の黄麗珠（ホワン・リージュ）さんを尻込みさせた。菜食の推進は順調に進むのだろうか。

マレーシアはコロナ禍で三月十八日から活動制限令が発令され、宗教活動の場の開放や集会が禁じられた。昨年初めに慈済ボランティアの認証を受けたばかりの腎臓病患者である陳南鸞（チェン・ナンルアン）さんは、四月に率先して菜食弁当の調理担当という重責を引き受けた。五月十日に政府が条件付きで活動制限令を緩和させた後、十七日、ソーシャルディスタンスを守るという原則の下に、少数の調理ボランティアが静思堂に

集まって、菜食弁当の任務を引き継いだ。ケダ支部はこの菜食推進活動を「速速推素（素早く菜食を推進）」と名付けた。

南鸞さんは五時に起床して弁当を作る。得意分野を活かして多くの人々を、菜食に招き入れることができるのなら、少々苦勞であっても彼女は幸せだった。活動制限中に夫と子供の仕事にも影響が出ていたが、タイミングよくこの想定外の収入が得られ、家計も助かった。

タイ人の南鸞さんはここに嫁いで長いため、マレー人の味や好み、腎臓病患者に適した食材もよく知っていた。彼女の作ったおいしい料理が、人々の菜食に対する認識を一新した。黄看護師長は、二

人のマレー人患者が先ず菜食を始め、その後は次第に治療後に菜食弁当を持ち帰る人が増えていった、と嬉しそうに語った。心配はこの瞬間安心に変わった。

イクラムさんは、少しはにかみながらこう語った。多くの病気は食べ物から始まるが、誰もが恐れる新型コロナウイルスも動物から始まった。それに、菜食は省エネや二酸化炭素削減によって地球を救うことにもつながるので、できる限り肉食を減らして、野菜を多く食べるようにしたい、と。

活動制限令が緩和されると、毎週金曜日以外の六日間、調理ボランティアは決まった時間にケダ静思堂の厨房に集まり、腎臓病患者やその家族、そしてボランティ

ア仲間のために菜食弁当を作るようになった。幹事の林育芝（リン・ユージー）さんによれば、腎臓病患者のためにいかにして、おいしくて体にもやさしい料理を作るかが一番の難関だったという。まずは油、塩分、糖分、調味料を減らすことが最大原則である。というのも、患者がナトリウム、カリウム、リンなどを取りすぎると不整脈、骨格異常、皮膚の痒みやむくみなどの症状が出やすいからである。カリウムの多い野菜などは、まず熱湯で茹でてから調理する必要がある。

「インターネットで調べてみると、菜食メニューの中には腎臓病患者が食べてはいけないものがあることが分かりました。



私たちにとっても、非常に勉強になりました」。料理好きの蕭美綱（シアオ・メイチョウ）さんも、最初は苦労したが何度も試行錯誤した結果、ついに腎臓病患者に適したメニューを作り上げることができた。

調理ボランティアはチーム毎に週二日当番し、毎日三種類のおかずが入った作りたてのお弁当ができるとその写真をSNSグループに投稿する。それは注目を浴びるためではなく、その日のメニューをグループメンバーに見せてメニューが重ならないようにするための工夫であるが、知らず知らずのうちに同じ食材から新しい料理を作る励ましにもなっている。綺麗に盛られた彩り豊かなお弁当を

見ると、その味と香りまでもが画面越しに美味しそうに伝わってくる。

調理ボランティアは、食事制限を守りつつも変化のある味付けをすることができ。心のこもった料理が、陳漢彬さんの菜食に対する頑固な見方を変えた。「豆腐だけをとっても、さまざまな料理に変化でき、肉も野菜も同じだと思えます。肉を豆腐に取り替えて調理しただけで、同じようにおいしいのです」。

● 菜食弁当を食べた腎臓患者は四十二名に上った。五週間後、黄看護師長は驚くべき結果を目にした。「腎臓病患者は三カ月に一回血液検査をするのですが、五月

の検査の結果を見ると、多くの患者さんの血清リン濃度の値が明らかに改善していました。彼らは皆、菜食に参加した患者さんたちでした！」。腎臓病患者によると、血清リン濃度が高い状況が続くと骨格の痛みが生じ、ひどい場合には骨折に至ることもあるという。八週間後、もう一組の患者たちの血液検査結果でも改善が見られた。「やってみようか」という軽い気持ちで始めた菜食が、意外にも腎臓病患者の健康が改善したのだ。透析センターのスタッフたちは更に自信を深め、今後さらに菜食を推進していく気持ちをも固めた。（慈済月刊六四九期より）

●ケダ州の慈済ボランティアたちは心を込めて菜食を呼びかけている。そのおいしさに、腎臓病患者たちは菜食に対する今までの偏見を改めた。



◎ 訳・慈願 絵・陳九熹

肉食を断ち、菜食で健康を守る

疫病は人類の力では止められないため、引き続き警戒を強めなければなりません。肉食を断つのは菜食から。

「病は口から」という食物連鎖を断ち切ることです。

敬虔に斎戒し、人々の心の力を結集して平安を祈りましょう。

年

末年始に際して、心から皆さんを祝福し、これまでの平穏な年に感謝すると同時に、未来に対して発心立願しなければなりません。毎日、世の中の平穏無事を祈っておりますが、「とても心配です」という言葉を去年の初めから今日まで言い続けてきました。まもなく年が変わるこの時に、私の心を塞ぐ憂いは言葉に言い表せないほどです。

この一年来、新型コロナウイルスは世界に拡散し、未だに鎮まっていません。

今回のコロナ禍で、多くの国が都市閉鎖を実施し、どこにも行けない状態ですが、慈済の救済活動は中断することなく、十分な予防対策をした上で苦難の所に向き、慈悲と勇気をもって奉仕しています。あらゆる情報や資料は本部にフィードバックされ、私は応

接室に座って報告を聞いています。ここは広くないですが、視野を精一杯広げています。私の目となり両手両足となって、私の行きたい場所に赴き、人々に寄り添って奉仕をしている皆さんに感謝します。皆さんはあらゆる困難を乗り越え、一途に衆生が安らかな喜びを得るられよう、苦勞を厭わず彼らに関心を寄せています。それが慈済人に共通する信念なのです。

見える、聞こえる、行きつける所なら慈済人は直ちに駆け付けて奉仕しますが、手が届かない所もあります。例えば、インドの貧困地区の住民たちは

を造らないことです。国連食糧農業機関の二〇一九年の統計によると、一年間に八百億を超える動物が人類の食用として屠殺され、一日に二億余りの生命が消失しています。衆生は平等であり、動物は殺される時、私たちと同じように恐怖と痛みから怨恨を抱きます。人類の欲望には際限がなく、呑み込んだ動物によって病は口から入ります。動物の持つウイルスが人に伝染する経路を断ち切って、健康を護るべきです。菜食する人が多ければ、飼育する動物の数は少なくなり、呼吸や排泄による大気汚染が避けられ、大地と水資

コロナ禍で一層苦しんでおり、神職者たちが長期に亘って寄り添っています。彼らは私たちからの物資と食糧支援を機に、そして、私たちは彼らの人力を頼って貧困者への配付を行いました。人を助けることができるということに、絶えず感謝しなければなりません。

疫病は人の力で防げるものではなく、常に警戒心を持ち、人々が敬虔に心を合わせ、齋戒して菜食し、愛の心を凝集させて人々を幸せにすることが必要です。また、それは口先だけの愛ではなく、完全な愛でなければなりません。菜食を始めることで肉食を断ち、悪業

源を含めて地球環境の負担が軽くなります。「菜食すること」と「それを広めること」は不可欠であり、慈済人が身をもって始めなくてはなりません。仏陀の教えは、天下の衆生は皆、仏性が備わっている故、衆生を救い愛護するように、とあります。

五穀雜糧は人体に栄養を与えて、根菜類の味は人を満足させ、衆生に対して悔いることがないため、身も心も軽やかになります。更に、過剰な食べ残しの浪費は控えるべきです。苦難の人たちは白いご飯を見ることがさへ困難です。私たちはそのご飯を食べることが

でき、農民の苦勞に感謝し、大地の養育の恩を知って幸せを大切にしなければなりません。

毎年、私の同じような願は、いつでもな時でも変わることはありません。世の中が平安で社会が穏やかになり、人々が良い心、良い願、良い行いをすれば、それが誠意のある大愛となり、天下の衆生を護ってくれることを心から祈っているのです。何時も慈済人が両手を胸の前に合わせているのを見ると、それが私の心であり、弟子の心でもあると同時に、師弟の心が合わさって仏心になるのだと思っています。「竹筒歲月」

世の浄化と言えるのです。

五十数年前、私は家を離れて花蓮で独り修行を始め、普明寺裏の木小屋で写経や読経をし、經典を拝んでいた時、半升のお米を一カ月間に食べ終えることができませんでした。その時は一人きりで孤独でしたが、縁によってそれほど大勢の人たちに巡り合い、共に慈済志業を成就させ、人々が歩む菩薩道を切り開いて来ることができました。これは私たちに共通する使命感であり、その感動と感謝は言い尽くせません。『普賢菩薩警策文』の言葉に「是日已過；命亦随滅；如少水魚；斯有何樂？

の五十銭から始まった、僅かな積み重ねは止まったことがなく、その情をさらに伸ばして大愛を広げており、人道援助は既に百カ国以上に歩みを進めています。

慈済の慈善は一時の支援だけに止まらず、縁を大切にした長期に亘るもので、苦難の人に心の安らぎを与え、彼らが落ち着いた暮らしをして自力更生できるまで続けられています。そして彼らが共に他人を幸福に導いて、人生が変るようになるまで導いています。助ける側の人が多様な困難を克服して、凡夫から菩薩になってこそ、真にこの

（一日が過ぎると、命もまた少なくなる。水が少なくなったら、魚は何が楽しめるう？）とあります。人生の無常に警戒心を高め、秒刻みに一日が過ぎれば、この人生もまた一日少なくなるのです。時は止まってくれません。時を追いかけて生命の歴史を書くのです。新たな一年を迎えるに当って、更に一分一秒を大切にして発願するのです。常に奉仕すること、人の役に立つ人間になること、そして絶えず世に幸福をもたらす、智慧を増やすのです。皆さんの精進を願っています。

（慈済月刊六五二期より）

宗教を超えた協力でインドを支援

台湾の民衆は、宜蘭県に在住するデイドーネ・ジュゼッペ神父のイタリア援助の呼びかけに熱烈に応えた。神父は、慈濟がインドのコロナ禍に誠意をもって関心を寄せていることを感じ、所属している修道会の協力の下に愛の連絡網を立ち上げた。

人口十三億を擁するインドでは、昨年十一月十日時点で、既に感染者数が八百万人に達し、世界で二番目に多くなった。防疫の為に全国で使われた社会資本は計算することすら難しく、都市封鎖、工場の稼働停止、店の営業停止などによって億単位の人が失業して生活

が困窮し、外部からの緊急支援を必要としている。台湾や世界各地の慈濟ボランティアは、防疫規制で現地に行くことができないため、カミロ修道会や神の愛の宣教会及び二カ所のチベット仏教寺院など異なる組織と協力して、四月から十月末までに十万世帯余りに支援物資を

配付した。

その中で、カミロ修道会との縁とは、二〇二〇年四月、台湾で半世紀以上奉仕してきたデイドーネ・ジュゼッペ神父が、新型コロナウイルスの感染深刻な祖国イタリアを支援するために、台湾の人々に防疫物資を購入する募金を呼びかけたところ、熱烈な反響を得た。その間、慈濟は中国現地のボランティアと連絡を取り、世界中で防疫物資が不足していた状況下で、買い付けに協力した。慈濟基金会の顔博文執行長は自ら、カミロ修道会に属する羅東聖母病院を訪ねて関連事項を協議した。

慈濟がインドに拠点も対応窓口もなく、支援活動が困難をきたしていたことを知って、カミロ修道会はインドの宗教界、医療関係者及びボランティアと連絡を取る手助けをしたほか、大部分の貨物の受け取りから発送、配付活動を請け負った。

インドカミロ修道会は、慈濟の支援食糧を首都ニューデリー、東部のアッサム州、偉人マハトマガンジー及び現任総理モディ首相の故郷グジャラート州を含む国十三の州に配送した。修道会以外にも、ノーベル平和賞を獲得した故マザーテレサが創設した神の愛の宣教会もコルカ



タで、現地まで行けない慈済ボランティアの代わりに支援食糧の配付を行った。

生命の難関を乗り越えて

もう一つの重要な協力パートナーは、インド仏教ABM組織である。構成員のブラヴィン・バレセインさんは二〇一四年の「インド国際仏教セミナー」に参加

●インドの聖ヴィンセンシオの宣教会は、慈済の国連チームを通じて直属の病院、診療所、修道女会、教会に対する支援を求めた。慈済はインド佛教ABM組織に緊急支援プロジェクトを行動に移すよう、依頼した。そして修道女会の女性ボランティアたちが協力して物資の梱包を行い、分院とカトリック教会病院に届けた。

した時に慈済と出会い、翌年三月に母親と台湾に来て證嚴法師を訪ねた。四月にネパールで大地震が発生した時、プラヴィンさんは災害支援団に加わって被災地に行き、その後、慈済のインドでの連絡員になっている。今年、彼の呼びかけでABM構成員たちは、任務を果たすためインド西部の都市ムンバイ(Mumbai)とプネ(Pune)に赴き、慈済ボランティアの代わりに二千世帯の貧困者に白米を配付した。

●カミロ修道会は信者及び警察署等多くの組織や団体に要請して、防疫規定及び現地の宗教規範の下に配付活動を終えた。

「五月末にボランティアは名簿作成に取り掛かりましたが、貧民地区が分散しているので容易な事ではありませんでした。各地区には手伝いを買って出る人はいるのですが、パソコンがないので、手書きするしかありませんでした」。インドの貧困救済事務を担当している、慈済基金会職員の陳尚薇（チェン・シャンウエイ）さんは、手書き名簿の写真を見せてくれた。

五月下旬、インドは非常に強いサイクロン・アンファンに襲われた。コロナ禍に天災が加わって、物資による救済の必

要性がさらに切迫したが、政府は防疫のため、六月半ばに外出制限令を発令し、七月にムンバイ市とプネ市でもっと厳しい都市封鎖令が出た。初めボランティアは通行証を申請して訪問ケアに出ることができたが、これによって名簿作成は暫時停止するしかなく、支払い業務を行っていた銀行でも行員が感染して、業務を停止させられた。

八月になって政府は制限を緩和したものの、コロナ禍が治まってきたからではなく、これ以上封鎖を続けられれば、民生生活に影響を及ぼすからだった。ABM構

慈済とインドの団体による共同作業 コロナ禍での貧困支援の統計

- 📍 **インド仏教ABM組織**
ムンバイ市、プネ市 **2,000**世帯
- 📍 **カミロ修道会**
13省 合計 **62,811**世帯
- 📍 **神の愛の宣教者会**
コルカタ **19,600**世帯
- 📍 **ニカ所のチベット仏教寺院**
3カ所 **1,830**世帯



資料の提供：慈済基金会 統計日：11月1日

成員はそれを機会に、慈済の支援物資を配付した。民衆が集まって感染するのを避けるために、今までの一度に千人や二千人が集まる大規模な配付に代わって、村単位の小規模な配付を行った。ボランティアはトラック後ろについて村から村へと出向き、一度の配付は数十世帯にとどめた。皆マスクと手袋を着けて感染予防に努めたが、受け取りに来た住民は、警戒心は持っていないもマスクを買う余裕がないため、インド伝統衣裳の「サリー」で口や鼻を覆って飛沫防止に努めていた。しかし、その精一杯の防疫行動



を見て心配を禁じえなかった。

「私は毎回、彼らと連絡を取る時は何時も、注意しなさい、注意するのよと言っています。彼らが出掛ける時やメールが送られてきた時は必ず、心配でこう聞きます、『予防対策を充分に取っていますか?』と。陳尚薇さんが今でも覚えているのは、配付活動が始まった後、プラインさんが初めて彼女とオンライン視聴会議で言った言葉は「師姐(スージエ)、私はまだ生きていますよ!」だった。

コロナ禍の下で、外出して物資を配付する時、自分は絶対に大丈夫だと保証できる人はおらず、気をつけるしかない。

配付する時、もしも場所的に許すなら、ボランティアは仏陀の法像と著名仏教政治家のアンベードカル博士の肖像を掲げる。大多数がカースト制度の低層階級の人たちにとって、仏陀の衆生平等、慈悲濟世の教義やアンベードカル博士が唱える仏教の復興は、カースト制度廃止や不可触民の解放を呼びかけるものとして、希望の象徴となっている。

ABMボランティアは同時に慈濟の祝福を伝え、横断幕に中国語と英語、ヒンディー語で「慈濟は人生の難関を乗り越えるために寄り添います」と書かれてあり、慈濟ボランティア及び世の善意の

人々の支持と祝福を伝えた。ボランティアは英語と現地の言葉であるマラティ語で證嚴法師の慰問文を読みあげ、文盲の村人にも理解してもらった。法師の祝福にABMボランティアは深く感動した。

「慈濟の創立者である證嚴法師の祝福を、現地の言葉で話したことを光栄に思っています。それを百回以上も読み返しました。これは地球上で生きている人類が覚悟すべきことを反映しています」。ABM創設者兼主席のシイタラム・ガイ

●インド北部のブッダガヤ及びワラナシの3千5百世帯の貧困者及び弱者家庭が寺院に慈濟の支援物資を受け取りに来た。

クワド氏によると、自分はインド教カースト制度の下層階級の出身で、六十四年前、母親と村で物乞いをしていた時、突然、ある人が「あなたは不可触民ではない、仏教徒になったからには物乞いをしてはいけない」と母親に告げたそう。

仏教に帰依した後、ガイクワド氏は自力更生することを学び、自分は不可触民ではないと心に決め、奮起してカースト制度の束縛から脱け出して、社会で人望のある人になるよう努力した。彼は一九八四年にA B Mを創設した。メンバーたちは彼に追従し、アンベドカール博士

の理念を発揚して、五ルピー（約七円）でも善行することができるというスローガンの下に、社会から善のエネルギーを集め、女性や子供、社会的弱者を支援する文教慈善を推し進めている。

「慈濟は私たちにより大きな変革をもたらし、他人に物乞いをしていた人が転じて何千、何万もの貧困家庭を助けて、生計を維持できるようにしているのです」。ガイクワド氏の感想は、「他人が自分を度する」そして「自分で自分を度する」、それから「他人を度する」までの過程を表している。（慈濟月刊六四九期より）

国際慈善

口述・黄静恩（慈濟基金会執行長事務室職員） 整理・編集部 訳・有田夏子

最も貧しい場所で 最も苦しい人をケアする

街にあふれかえる貧しい人々は、生き続けることよりも、この世を旅立つ時を待っているかのようだった。教会の外では、一食分にも満たないわずかな食糧のために、いつも大勢の人々が行列をなしていた。物資を手に入れた修道女たちは、毎日教会の扉を開け、街に出て配付を行うことにした。

「神 父さん、休息を取っていますか？」「休息？それは贅沢というものです」。

「外は暑いですから、よく水を飲んでください」。「水は飲みますよ。でも私たちが休息すると、貧しい人たちは増えて

いくので、急がなければなりません」。

今年の五月から六月にかけて、カミロ修道会主席のエリック神父とビデオ会議で話し、彼らが撰氏四〇五十度の炎天下でも必ず制服を着て配付に出かけていることを知った。慈済と修道会は今年四月から救済プロジェクトで協力を開始していたが、五月には貧困者数が四月の六倍にも増加していた。コロナ禍により、貧困が深刻さを増しているのだ。

修道会と慈済は四月から八月までに、八万人に物資を配付した。これは延べ人数ではなく、実人数であり、物資は彼らが三カ月間生活するのに十分な量だった。

マスクをしないのですか？」と私が尋ねると、神父は「慈済から支援していただきましたが、マスクはそれを必要とする人々に譲りたいのです。節約が力を生み、愛を届けることができます」と答えた。

カミロ修道会とビデオ会議で話す度に、感謝する気持ちになる。神父や修道女たちは、常に感謝と節約を忘れずに、受け取る物資をすべて貧しい人々に配付しているのだ。神の愛の宣教師会の修道女たちにも、このような誠実さが見られる。彼女たちは、受け取った物資が何であれ、真っ先に貧しい人々に届け、自分たちのことは後で考えるのだという。彼

た。政府が都市封鎖を解除しない限り、人々の収入は途絶え、お金も食べ物も手に入らなくなってしまうが、封鎖を解除すれば感染が益々広がり、真っ先に犠牲になるのはやはり貧しい人々なのだと神父が言った。「救っても救いきれるわけではありませんが、それでも救い続けなくてはなりません。私たちはインド全土のカトリック教徒だけでなく、プロテスタントや婦女協会にも呼び掛けて、共に力を合わせ、貧しい人々に尽くしています」。

神父はマスクの代わりにタオルで口元を覆っていた。不思議に思っ「どうして

らとのコミュニケーションを通じて、貧しい人がいかに多いかということを知って驚いた。

修道女の持ち物は、制服三着とサンダル一足、数珠一連、十字架一つ、聖書一冊、そしてお皿とスプーンのみである。彼女たちはカトリック教会に伝わる貞潔・清貧・従順の教えに従って生活するだけでなく、全身全霊で最も貧しい人に尽くすという四つ目の誓願を立てている。

教会の外に一步出て目にするのは、乞食や貧しい人々だけなのだ。修道女は言う。家もお金もなく、身に着けた貧しい服のほかには何一つ持たない彼らは、ま



るで生き続けることよりも、この世を旅立つ時を待っているかのようだ。貧困と病の悪循環が、貧しい彼らをさらに苦しめる。介護をする人のいない年寄りも、街中に放り出され、そこで死を待つばかりとなる。子供たちも、自分たちの未来が見えないままだ。

毎日、教会の外には、一食にも満たないわずかな食料のためにも静かに待って並ぶ人々がいる。「貧しい人々は街中にあふれるほど多いのですが、それでも助けなければなりません。見て見ぬふりな

ど、できません。貧しい人と同じものを、私たちも食べています」。修道女たちにとつて、慈済からの物資は神からの贈り物であり、感謝の気持ちは言葉に尽くせない。修道女たちは会議を開き、毎日教会から街に出て、路上で配付することを決めた。

疫病が蔓延しているのに、どうして路上で配付しなければならないのかと尋ねると、修道女は「そこが一番貧しい場所ですから、行かないわけにはいきません」と答えた。コルカタは広く、船でしか辿り着けない偏境の地もある。多くの物資を持つ

た修道女たちに住民たちは座席を譲る。彼女たちが貧しい人々を救おうとしていることを知っているのだ。修道女たちは物資を携えて無事に川を渡った。船から物資の荷下ろしをすると、住民たちがリヤカーを引いて配付場所まで運んだ。

修道女たちは、持てるもの全てを病に苦しむ人や身寄りのない人々に分け与え、自分たちには何も残さない。防護グッズを身に着けて慎重に配付を行っていて

●慈済が準備した小麦粉、白米、粟、そして1万枚余りの医療用マスクなどの物資は、神の愛の宣教師会が通行許可の申請と物資の通関に協力してくれたので、手早く住民に物資を届けることができた。



を乗り越えた。修道女たちは、慈済は神の遣わした天使であり、證嚴法師とマザー・テレサは共に、暗闇にいる人々の心を明るく灯す一大宗教家だと述べた。

この言葉を聞いた私は、エリツカル神父が「證嚴法師と慈済の愛がインドの暗闇の中にいる貧困者に一筋の明かりを灯した」と言ったことを思い出した。配付に参加するたび、世の人々の苦しみが見

も、十二人の修道女に感染の疑いが生じ、そのうち二名が不幸にも命を落とした。だが修道女は、故人はこの世に思い残すことなく、天国で人々のために祈り続けているはずだと述べた。

神の愛の宣教師会の院長は、慈済は彼らが最も助けを必要としている時に逸早く支援に来てくれた非カトリック団体だったと言う。物資の輸送は困難続きだったが、みんなが心を一つに協力して困難

●お腹をすかせた住民たちは、修道女たちの配付する食糧を受け取るために並んでいた。マスクは手に入らないので、衣服で口元を覆っていた。

える。身寄りのない年寄り、主人亡き後に家計と養育を一身に背負う未亡人や、その日の食べ物すら手に入らない貧困な不可触民が存在するこの世に、宗教を超えた協力が、これからも続くことを願う。これはカトリックだけでなく、仏陀と慈済を代表する行為でもある。命の尊さは、自分も他人も同じなのだ。「一人はみんなの為に、みんなは一人の為に」と言う言葉を信じている。

コロナ禍で世界中が都市を封鎖している。證嚴法師は、慈済が直接行って貢献することができない場所では、過去に協



●路上や村々で配付する修道女たちは、家も身寄りもない病人たちを見つけると、まずは新型コロナウイルスに罹っていないことを確かめた後、修道院に連れ帰ってケアをする。

力したところのある人道組織や医療機関などと連携を考えるべきだと言った。そこで、フランスに本部を置く世界医師会（MDM）を通じて、南スーダン、ベナン、イラク、マダガスカルなど二十六カ国に物資を届けた。国連難民高等弁務室と長年、協力関係にあるタイとマレーシアの慈済ボランティアのおかげで、愛の道が切り開かれた。このような非常事態には、自他の分け隔てなく、宗教を越えて協力することが必要だ。

善行には多くの挑戦がつきまとう。予想どおり物資の購買や輸送では多くの困

難に遭遇したが、最も苦しんでいるのは自分ではないことを知っていたので、全身全霊で努力して成し遂げた。

慈済はインドの貧しい人々に対して、半年分の食糧を支援する予定だ。そして證嚴法師は、疫病が続くかぎり中下層の貧困家庭は増していくのだから、支援を停止してはならないと言った。世界中の愛ある人々から少しずつ善意の寄付が集まり、功德の海に入り、最も貧しい人々がこの最も困難な時期を乗り越えられることを心から願い、祝福したい。

（慈済月刊六四九期より）

真面目に生活して、 許しを請う

楊志偉（ヤン・ジウエイ）さんは刑期を終えて出所した後、慈濟ボランティアになり、社会に償いをしている。一生懸命働くのは生活の為だけではない。法律の制裁を受けたとはいえ、被害者に与えた傷は決して許されることはないのだ。彼には被害者の家族に自分で言いたかった一言がある。「私を許してください」。

撮影・詹大為（彰化慈濟ボランティア）
文・高肇良（彰化慈濟ボランティア）
訳・惟明



寒

波が襲来した早朝四時過ぎ、空はまだ暗かった。彰化県埔心郷に住んでいる楊さんは起床してから『地藏経』を一通りあげると、分厚いコートに身を包んで牧場に急ぐ。気を付けながら温かい羊乳のビンをバイクに乗せ、顧客へ配達に行く。二時間余りかけて配達を終えると、もう一つの仕事が残っている。

楊さんと初めて会ったのは二年前のことである。花蓮事務所から出所した彼がボランティアの高惟碇（ガオ・ウエイイン）師兄（スーシオン）に付き添われて、故郷の彰化県埔心郷に戻った時、私の家に来てくれた。坊主頭で口数の少ない彼は、私が地域の月例読書会やリサイクル・

●楊さん（右）は慈済のリサイクル・センターで仕事を自ら買って出た。リサイクルの仕事をしていると自分も再生されていくように感じた。

デーについて話すのを聞いていた。「慈済活動への参加は二の次で、与えられた仕事をきちんとこなすことが第一条件です」。彼は黙って私の話を聞き、初対面の私に合掌してお礼を言った。

一九八二年生まれの楊さんには姉と妹がいて真ん中だが、男の子は彼だけだった。幼い頃から良い家庭環境の中で育ったが、中学の時の反抗期に、タバコを吸うことを覚え、学校をさぼるようになった。そして、高校生になるとドラッグを使うようになり、暴走族に仲間入りした。

お金を困ると危ない橋を渡って、暴走して強盗を働き、逮捕された。十六歳の時に少年院に送られ、高校も中退した。三年間にわたる刑期を終えると、兵役で金門島に配属された。

兵役を終えて台湾本島に戻れば新しい人生が始まると思っていたが、いつの間にか墮落した原点に戻っていた。彼はホテルの電気整備士として、月給三万円（約十万円）の仕事に就くことができたが、暇な時に博打をしたり歓楽街に出入りしたりしていたため、次第にお金が足りなくなつた。「博打では一晩居続けて五、六万円（約十八万〜二十一万円）勝つたこともあり、それに味を占めてだんだん、

欲が出るようになりました。一日中頭の中でどうやってもっと金儲けができるかを考え、仕舞いにはホテルの仕事を辞め、スクラップの回収を始めました」。

表向きは合法のスクラップ回収業だが、裏では盗品の違法売買をしていた。「業績」がいい時は月に二十万円（約七十二万円）余りの売り上げがあったが、いい時期は長続きせず、すぐに悪事を働くようになり、それが発覚して、警察が手掛かりを掴み、彼を逮捕しようとした。そんな時、彼のお金は幾らあってもすぐに煙のように消えた。賭博の借金返済のために、闇金融の高利貸しに手を出した結果、遂に行き詰まってしまったことも

ある。二十六歳の時、路上で強盗を働いて捕まり、実刑十六年の重い判決を言い渡され、刑務所に入った。

更生の道は試練

楊さんが服役して二年も経っていないかった時に、家から悪い知らせが届いた。彼を最も可愛いがってくれた父親が食道癌で亡くなったのだ。父親は亡くなる前、手錠と足錠を嵌めた彼が友人や親戚の目に止まれば、彼の自尊心が傷付くから、告別式には彼を参加させないようと母親に言い残していた。父親は最期まで彼を心配してくれていたというのに、自分

を省みると父親を氣遣つたことなど一度もなぞなかった。

楊さんは刑務所の中で大声をあげて泣いた。孝行ができないまま父親を亡くした悲しみは、彼にとって大きな打撃となり、それが彼を改心させた。父親に恩返しする為に、彼は高校を卒業することを心に決め、花蓮刑務所付属正徳高校に入学した。

高校卒業の年に高雄でガス爆発事故が発生した。慈濟ボランティアの高さんとチームメンバーが刑務所を訪れた時、愛の心を募る活動も行なったのだが、皆に一元でも五元でも発心すれば菩薩になると啓発した。楊さんは、五元の切手を寄付した。領収書をもらった時、慈濟人



が自腹で九十五元の切手を貼って百元にし、受刑者名義で災害支援をすることで、善意を起こさせようとしていたことに気づいた。

「社会を利用することをする人がいるのに、自分は非道な悪事ばかりしてきた」。楊さんは慈済ボランティアになりたいという考えが芽生えた。二〇一七年に仮釈放された後、高さんの付き添いで彰化に戻ってから、私が引き継いで彼に付き添うことになった。

彼は故郷に戻ってから慈済に参加し、社会復帰の第一歩を踏み出したが、試練が待ち構えていた。出所して一カ月も満たなかった時、仕事中に不注意で高い所

から転落して手を骨折してしまい、元気をなくしたのである。同じ元受刑者として、私は彼に、諦めないようにと寄り添うと共に、生計に問題が起きないように生活費を支援した。そして、仕事ができない間を利用して、ドラック防止キャンペーンに連れて行った。彼が手の怪我で仕事を休んでいた三カ月間、私は毎日、彼を連れてボランティア活動に参加し、地域ボランティアの研修に申し込むよう励ました。

七万元のため

私は仕事に復帰した楊さんの様子を傍で見っていた。彼は毎朝四時に起きてアル

バイトで羊乳の配達に行き、続いて七時半から鉄工場でパートの仕事をした。暇な時はスクラップ工場でトラックを運転して、回収物を運んだ。ある日、不思議に思っ、「どうしてこんなに懸命に働くのですか？経済的に困っているからですか？」と彼に聞いた。

楊さんは沈痛な面持ちで、ゆっくりとその訳を話し始めた。

「私は十年前に七万七千元（約二十八万円）を奪う強盗を働きました。法律に裁かれて服役しましたが、よくその時の状

●楊さん（左1）と高さん（左2）は刑務所で自分たちの経験を皆と分かちあい、改心するのはいつになっても遅くはないことを受刑者たちに知ってもらった。（撮影・翁華伶）

況を思い出すのです。被害者の恐怖に満ちた表情が頭に残って消えません。私は罪悪感に満たされていきます。慈済に参加してから因縁果報の重要性をよりよく理解するようになりました。私は被害者に謝罪して、当時奪ったお金を償いたいと思っています。羊乳を一年間配達すれば、十万元(約三十六万円)を貯金できるはずです」と彼は意志を堅くして言った。

私は彼の話聞いて、余りの感動と喜びに言葉が出なかった。経済的に安定していない彼が慈済に参加しても間もないのに、過去の過ちを反省し、懺悔してい

私を許して下さい

楊さんは生活を切り詰めて、一年余りで必要なお金を貯めた。私は旧知である彰化地方檢察保護觀察官室の蔡欣樺(ツイ・シンホワ)主任に電話し、保護觀察官の孫啓俊(スン・チージュン)氏にも協力を求めた。孫氏は長年の古い資料を探して、やっと被害者の一人である蔡さんの資料を見つけてくれた。連絡した限りでは先ず良好な返事が得られたので、「修復的司法」の手続きに入った。

二〇一九年十一月二十八日の午前、彰化地検が彰化師範大学の李先生をコーディネーターに任命し、加害者と被害者



修復的司法

犯罪行為によって直接影響を受けた人達、即ち加害者、被害者、家族、地域社会の人たちまたはその代表者に、色々な形式の対話や問題解決の機会を与えて、加害者にその犯行による影響や自己責任の取り方を認知させ、被害者の心の傷跡の修復及び実質的な損害補填をする。

懲罰に重点を置いていたのではなく、公的司法を補充する新しい意味を持ち、むしろ真相を話し、謝罪し、慰め、責任を取って、修復する中から正義を見つめることを目指している。

(資料出所・新竹地検)

るのは実に容易ではない。彼の言動が一致しているのが分かり、自分の堅い意志でボランティアになったことで、私ももっと安心することができた。

双方が地検の会議室で対面した。楊さんが待ちに待ったその日が遂にやってきたのだ。

十年を隔てた再会の場合は少し厳肅な雰囲気にも包まれたが、双方のわだかまりもなくそうと李先生がプロの技で和らげてくれた。そして間もなく、楊さんと蔡さんは穏やかに話すことができた。

「貴方を傷付けたことに人生最大の罪悪感を感じています。法律の制裁を受けて服役しましたが、長い歳月が経つても自分が犯した大きな過ちを忘れることができません。ずっと、貴方に直々に謝りたいと思っていますが、機会がありませんでした」と楊さんは蔡さんに話しな



●楊さんは毎日パートの仕事に励んでいる。自分には何人ものボスがいると笑って言った。余暇の時はボランティアに専念し、自分の人生を歩んでいる。

がら男泣きに泣いた。

「父親が私の服役中に亡くなりました。私は懺悔と感謝をすることを学び、自分を変えることから始め、学校に戻りました。出所してから今日まで、慈済のボランティアになり、社会に奉仕して過ちを償ってきました。今は工場で安定した仕事に就いています。蔡さん、本当に申し訳ありませんでした！許してくださるでしょうか」

楊さんの話をすっかり聞き終わると、蔡さんは感動のあまり泣き出した。そして、「私にお金を返してくれるということ、は、あなたが経済的に安定しているという意味ですね。もう社会に迷惑をかけて

いないようなので、とても嬉しく思います。これからもそうしていくことを期待しています。頑張ってください。私はあなたを許します」と蔡さんが続けて言った。

懺悔すれば間に合う

楊さんは毎週、仕事の合間を縫って積極的にボランティア活動に参加している。町内のリサイクル、連絡所の掃除、読書会など、慈済の活動では、いつも忙しくしている彼の姿を見ることができている。二〇一九年の暮れ、楊さんは法師の祝福を受けて慈誠隊員になった。

「法師は、懺悔してこそ清浄が得られる」と言いました。楊さんはその言葉を中心に納め、ここまで一緒に歩んでくれた人生の恩人たちに感謝し、「過去の私はただ欲望のままに生きていただけで、奉仕することを知らず、掌が上向きで貰うだけの人生を送っていました。この二年間、多くの活動に参加し、人生を無駄に過ごさないことがどれだけ良いことかを感じました。過ぎた三十六年間で比べてまるで天国と地獄の違いです」。善に向かうと心から願うと同時に、真心の懺悔こそが痛みをなくし、傷を癒やすことができる気がした。

（慈済月刊六四一期より）

裸足のお婆さん 環境保護の道を着実に

生涯を通して物質的な豊かさはありませんが、不足に感じるものは何もありません。
謝珍英（シエ・ジエンイン）さんは、自分で栽培した野菜は山海の珍味、残った時間は今まで以上に自分のために生き、最後に息を引き取るまで、ボランティアを続けたいと言った。

●謝珍英さんは冬にリサイクル活動する時も裸足で出かけることに慣れている。



「お婆ちゃん、おはよう！今日は寒いから、暖かくしてね！」ボランティアが白い息を吐きながら親しみを込めて挨拶すると、朝五時という暗いうちから家の前の街灯の光りを頼りに回収物の整理をしていた謝さんは、

「おはよう！着ているよ。二枚も着ているよ。ほら、このジャケットは暖かいよ」と、手を休めてボランティアに着ている服を見せました。

「お婆ちゃん、今日は靴を履かないの？」
「大丈夫よ、慣れているから。この方が楽なのよ」。裸足で三輪車に乗ると、勝手知った道順で資源回収を始めました。

七十一歳の謝珍英さんは彰化県大村郷

に住んでいました。小さい時から節約した生活は、彼女に天が授けて下さった足は永遠に破れない靴だと教えてくれたそうです。「下駄は一足五元もするし、壊れたらまたお金を使って買わなければならぬから」、それで靴を履かない習慣が身についています。

三輪車で自宅を出発して産業道路を走り、城隍街、田洋巷、貢旗二巷、と道すがら走ったり止まったりして一軒一軒で資源回収するうちに、荷台はあつとつと間にいっぱいになり、彼女の背丈よりも高く回収物が重くなりました。少し走っただけでも地面に散乱しそうなので、撮影に忙しかった記録ボランティアもそれを

見ると慌ててカメラを側に置き、回収物を積み上げて縛る手伝いをしました。

身長百四十センチの謝さんは、痩せて小柄ですが動きは敏捷です。三輪車は回収物を一度に多く載せられないので、家に戻ると直ぐに二回目の回収に出かけます。暗い時間から空が明るくなるまでの二時間に約十三キロ走り、二十軒近くから回収物を集めるのでした。

毎週月、火、木、金は三輪車で回収し、その他の時間は近くの公園で拾い集めるそうです。

「公園で私を見かけると家まで来てくれないかと声をかける人がいて、その戸

数が増え続けたので、回収物はどんどん多くなりました」。今では約三十カ所のお宅が彼女の回収を待っています。

彼女は地面にひざまずくと回収物を一つ一つと分別し、整理した鉄缶やアルミ缶、紙類などを手押し車に乗せてそのまま売りに出かけるのですが、ペットボトルだけは残していました。ボランティアは不思議に思っ、「お婆ちゃん、これは売らないの？」と聞くと、「ペットボトルはリサイクルステーションに持っていくよ。慈済に国際救済用の毛布を作ってもらうからね」という答えでした。

回収物を売って得たばかりのお金とせでした。三人の子供が成長するにつれ、額の大きい学費がだんだん負担になりました。村から産業が外部へ流出するにつれて就職の機会も少なくなり、三日働いて四日間休むという状態では収入が支出に追いつかず、家計を支えることが難しくなりました。お金がない時は言い争いが絶えないものです。「娘は『貧乏な夫婦は何かにつけ悲しい』と言いました」。言い争いは暴力的になり、四十四歳の時に彼女は毅然として家を離れました。一人台北で介護の仕事に就いてから既に六年になるそうです。

領収書を大切に握りしめ、家に戻るとビニール袋に仕舞います。月一回の地域の大型回収日に、そのお金を大村リサイクルステーションにいる慈済のボランティアに渡すためです。

足るを知れば、いつも豊かである

謝さんは以前、良妻賢母の生活を送っていました。結婚して六年目、ご主人が交通事故に遭ってからは家計の重責が彼女の肩にのし掛かりました。しかし、彼女はそれを苦と思わなかったそうです。家族が皆で平穩無事に過ごせれば幸

台北で働いていた時見かけた、大勢の慈濟ボランティアが軒下や木の下でリサイクルの仕事をする姿や、九二一大地震の後、南投で救済する姿に心を大きく動かされた謝さんは、二〇〇五年大村地区でリサイクル活動を始めました。今年で十四年になるそうです。

大村地区リサイクルステーションの責任者である張千豊(ジャン・チエンフォン)さんは、「お英さんは皆の模範です。道で彼女が一人で大きな回収物を三輪車に載せているのを見かけますが、その日が毎月の大回収日だと、いつも、二、三千元をリサイクルステーションに寄付しに来るのです」と言った。

その実、謝さんは経済的に豊かな人ではなく、生活費は月三千元だけです。だからといって、回収で得たお金をその足しにしようとはしません。「私の山海珍味は自分で栽培した野菜です。食べ物も着るものも人から頂くのでお金を使う必要はありません。ですから生活費を節約して、リサイクルで得たお金は全部寄付したいのです」と言った。

謝珍英さんはこう言います。「人生は終りに近いので、残りの時間を世の中のためリサイクル活動に費やして、自分の人生を全うしたいのです。最期まで頑張りたいと思っています」。

(慈濟月刊六四一期より)



經典を活用する

◎文・釋徳侃／訳・濟運

最高の伝法とは、道理を日常生活に取り入れ、
仏法を活かして人々に感じてもらうことです。

經典を大切にし、この世に広める

三十日、国立図書館の『コーラン』修復チームが来訪しました。胡光中(フー・グアンジョン)師兄(スーシオン)は五百年の歴史を持つ『コーラン』の手書きの写本を謹呈し、この修復作業は、予定としてまだ一年半かかると説明しました。

上人は、胡師兄からその『コーラン』を贈られた時、それはとても貴重で、歴史的に価値があり、自然と心から尊重する気持ちになったそうです。五百年という歳月を経て、表紙もページも脆くなつて

破れていましたが、国立図書館の専門家に修復の協力を依頼しました。「私は心からそれを愛おしみ、大切にしたい気持ちでいっぱいでした。その経典は修復する価値があると思った故に、『入院治療』させたのです」。

上人は、国立図書館の修復チームが歴史的に意義のある貴重な経典を保存するために、依頼を引き受けてくれたことに感謝しました。どの正信の宗教もこの世の真実を広め伝えており、経典を適切に保存し、伝えていくことで初めて、道理をこの世に伝承していくことができるのです。人間がどれだけ長寿になっても、いつかはこの世を去りますが、この経典のように五百年も伝えられ、破損しても修復することができます。経典があれば、宗教の慧命を残すことができます。そして、慈済が仏教経典を守る最良の方法は、それを活用することです。実際の行動でもって人々に仏法の道理を理解してもらおうのが、最良の修復方法です。

上人はこう言いました、「それぞれの宗教の精神理念はその教典の中にあり、人が心して学習し、伝承していかなければなりません。最も良い伝法は道理を日常生活に取り入れることで法が活性化され、それを人々に感じてもらうのです。慈済人が社会の中で仏法を實踐し、人々を思いやっていることにとっても感謝しています。その愛は一人から大勢の人に伝えられ、絶えず広まり、仏法を絶やすことなく永らえています」。

時は刻々と流れ去る故、日々精進する

昨年十一月三十日の午後、北部の十一回目の委員認証式と歳末祝福会が行われ、土城地区の和気チームによる林戸丸（リン・フーワン）師兄の人生ストーリーが語られました。師兄は一九八六年に慈済に参加し、直ぐにリサイクルセンターで奉仕し始めました。奥さんの陳姿

妙（チェン・ツーミヤオ）師姐（スージエ）もそれに賛同して参加するようになりましたが、彼女は養成講座に参加していた年に病気で亡くなりました。そして、戸丸師兄は二〇一二年に交通事故で頭部に大怪我をし、大半の記憶をなくしてしまいました。その後三年間休養してから、再びリサイクルセンターに戻り、法縁者たちのケアの下に少しずつ回復してきました。

昨年で七十三歳の戸丸師兄は多くのことを忘れてしまいましたが、リサイクル活動することで大地を守ることは記憶に深く刻まれており、毎日、雨にも風にも負けず、早朝の五時過ぎにバスに乗り、三峽リサイクルセンターに来て活動しています。彼はバスに乗ると、慈済志業について話し、愛を募っています。長い間を経て彼と知り合うようになった、ある善意の人は深く感動し、彼に会うたびに十元を渡し、センターの竹筒貯金箱に入れてくれるよう頼みました。

「彼は台上でそれを話し、私は席で聞いていました。側にいた慈誠（認証を受けた男性ボランティア）が私に、戸丸師兄は一日も休まず、精進している、と補足しました。私はそれを聞いて非常に安堵しました。彼が私に出会い、慈済に参加してから既に三十数年になります。彼は歳をとり、私も老いました。体の機能も含めて全てを時間にかけていかれ、一分一秒と時間は流れて行きます。一日過ぎれば、生命は一日短くなります。ですから毎日を大切にすると共に、有効に使わなければなりません」。

上人は皆に縁を大切にしよう言いました。師弟間の縁だけでなく、慈済の法縁者との間も良縁なのです。多くの菩薩と一堂に集まり、皆、無私の奉仕をして見返りを求めず、そして、真心から感謝すべき菩薩が発揮しているのが清浄無私の誠意のある愛だからです。「皆さんの前後左右に座っているのは全て生き菩薩です。法縁者同士、互いを大切にし、尊重して敬愛し合わなければいけません」。

（慈済月刊六五〇期より）

□地球にやさしい思考

善と悪の綱引き

人は悪の方向に向かうことも、
よい方向に向かって
努力することもできる。
それはただ一念にかかっている。
人々に善をなし福を造る心があれば、
福の気流がどんどん大きくなって、
悪業の応報を無くすことができる。

(『地球と共に生きていく』より)



2020年11月マレーシア・クアラルンプールでの補助金配付。

(撮影・林振勝)

二月の出来事

.....

訳・済蓮

02・02	台東県が池上郷に開設した多元的介護サービスセンターを、慈済医療財団法人が委託を受けて運営管理することになった。本日、花蓮慈濟病院の呉彬安（ウー・ビンアン）副院長が代表で出席し、台東県の饒慶齡（ラオ・チンリン）知事と池上郷の張堯城（ジャン・ヤオチョン）郷長の3者が契約を取り交わした。今後、障害者や認知症患者に対する介護を提供する。
02・03	慈済基金会は世界での新型コロナ感染予防措置の一環として送った約10万個のマスク、2万6千セットの手袋が本日、ポルトガル中

02・18	02・11	<p>アメリカ、テキサス州は2月、寒波に襲われ、低温による発電設備の停止で、各地の自治体は緊急防寒避難所を開設した。慈済ダラス支部は市の緊急要請を受けて、本日、90枚のエコ毛布を民衆に贈った。</p>	<p>市にある慈済医療センターで登録を済ませた資格適合者に接種した。</p> <p>静思精舎で、11日（旧暦大晦日）から13日（旧正月2日）まで、オンラインによる新春の挨拶が行われ、37の国と地域から2万2千を超える回線が繋がれた。また、12日（旧正月1日）から19日（旧正月8日）まで、33の国と地域の154の地域道場から5万人を超える人がオンラインで静思精舎と同時に『法華経』を礼拝した。</p>
-------	-------	--	--

02・07		<p>アメリカ、ラスベガスの慈済人医会はトゥーロ大学医学部のボランティアチームと共同で、7日、慈済ラスベガス支部にて地域のアジア系高齢者323人に新型コロナウイルスのワクチン接種を行なった。また、アメリカ慈済医療基金会はアメリカ政府から認可を受けたワクチンを9日から11日まで、カリフォルニア州アルハンブラ</p>	<p>部のトンデラとヴォウゼーラ、オリベイラデフラダス及びサオペドロドスルの4つの市政府に到着し、現地の住民と社会福祉機構のスタッフを支援する。また、ドイツのハンブルグ市にあるカリタス基金会移動歯科クリニックに9千8百個のマスクと5百セットの手袋、6枚の防護服及び千枚のマフラーを届けた。</p>
-------	--	---	--

02・27	<p>連した書籍を通して、読んだ感想を分かち合い、仏法精神を日常生活に取り入れることを呼びかけるのが目的である。</p> <p>◎慈済科技大学と慈済基金会は共同で初めて、「防災科技管理実務」講座を開設した。災害の管理と実務、地域防災活動の推進などで、学生が政府内政部の防災士ライセンスを取得して、正しい防災知識と技能を持つことを勧めている。</p> <p>慈済基金会と慈済大学は「ノーミート・マーケット」と共催で菜食を呼びかける活動を催した。27日と28日の2日、慈済大学は公益講座や調理法の公開、音楽会及びエコマーケットなどをテーマに、生命に優しい情報と環境を愛護する理念を発信した。</p>
-------	---

02・22	<p>◎静思弘法チームの徳伋（ドーファン）師匠と徳澡（ドーザオ）師匠たちが読書会の日程を公表して参加を呼びかける第1回目の活動が本日、花蓮慈済病院で行われた。慈済志業体職員に法脈宗門に関</p>	02・19	<p>慈済基金会は国や領域を超えたパートナーと共に「グローバル共善学思会」という学術交流のプラットフォームを立ち上げ、「手を携えて世界で善行し、社会責任を果たす」などをテーマにした討論を行う。第1回目の交流は、「宗教NGOによる世界の治世」をテーマに、元智大学社会・政策科学学部の丘昌泰（チウ・チャンタイ）教授と台湾大学政治学部の劉康慧（リウ・カンホエイ）副教授を招いて交流した。今回、討論会に15の国と地域から約千6百人が参加した。</p>
-------	---	-------	---

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2021年3月17日発行・291号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いです。(日文組編集同人)



街頭訪問ケア 年末年始に温もりを送る

「寒いから、暖かくしてくださいよ！」

「ありがとう！あなたたちはどこの団体ですか？」。

12月下旬から気温が急激に下がり、1月に強い寒波が全台湾を襲った。各地の慈濟ボランティアは、10度以下に下がる夜に備えて、地下道や歩道橋、駅、公園などをくまなく探して地面に寝ている路上生活者を見舞い、厚手の服やジャケット、マフラー、寝袋などを届けた。

(文・張京毓、徐月秀 撮影・張泰元 台湾基隆・2020年12月30日)



慈濟日本サイト 慈濟ものがたり